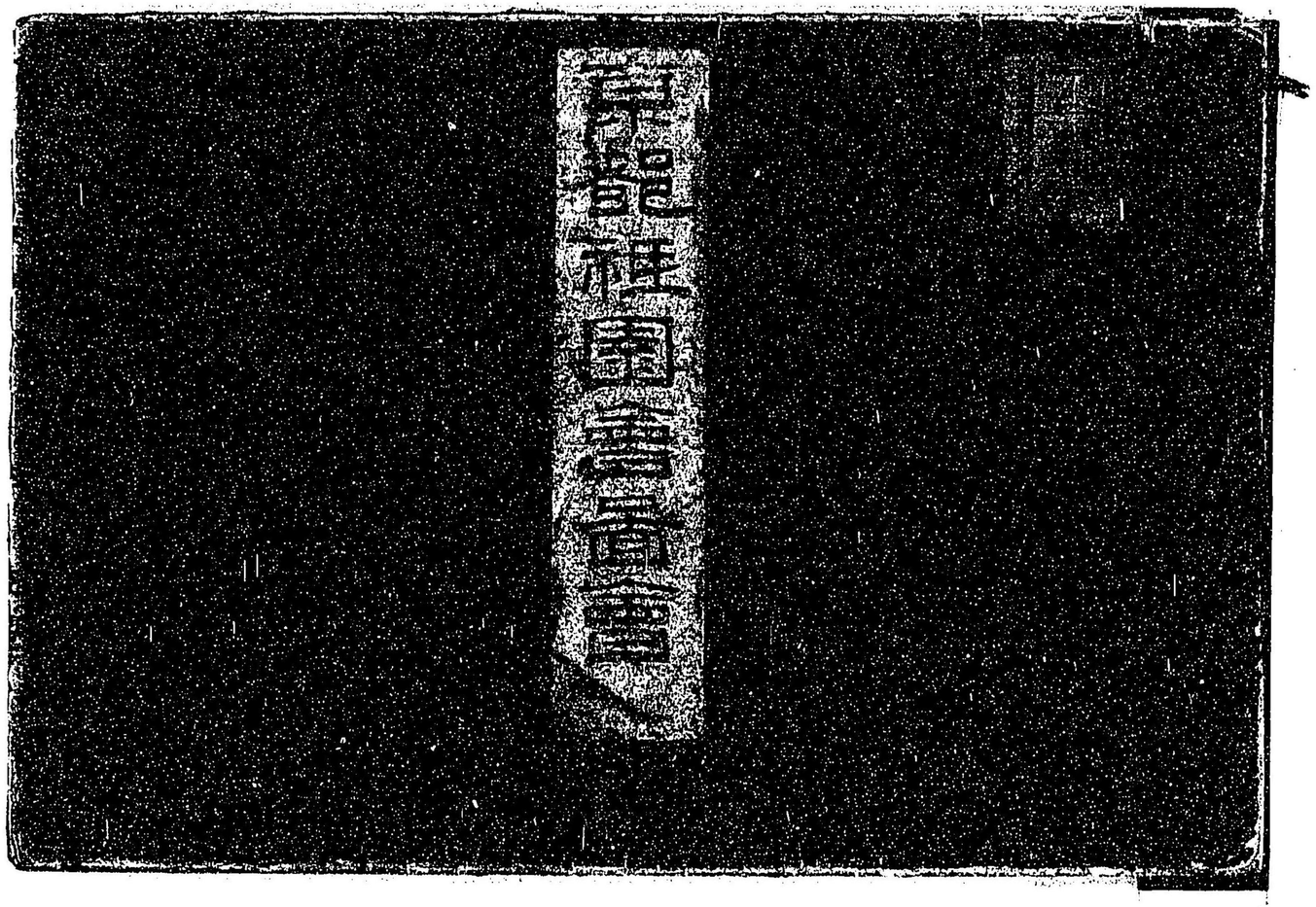


025315-000-7

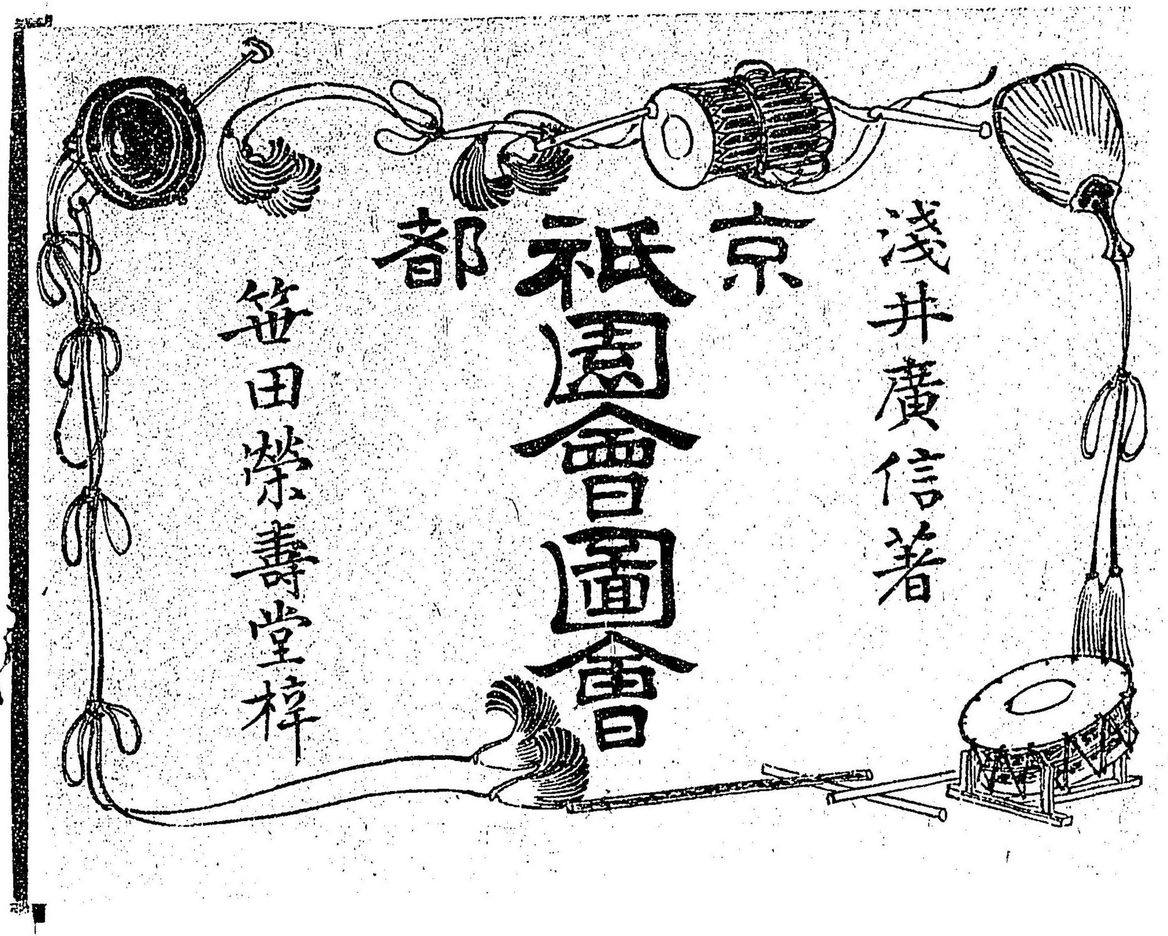
6-269

京都祇園会図会

浅井　広信／著

M27

ADC-2749



京都祇園會圖繪

緒言

祇園の會はいと古くより執り行はれて其竹のよのうつり變るにもかゝはらず今の如く盛かにしてましして其規式の五月のはしめより六月の末にかけて二ヶ月の長きにわたれるなどは世に類ひなきことならんとれを觀んとて水無月のあつさをもいとはず遠近より集ひ來る人々其幾千万なるを知らずされど其起原は素より山鉾の名さへも知らぬ人々の多かるは實に遺憾なることとなりとて今度これに關するこゝどもをもらさずおとさずまつぶさにあつめしるし名付て京都祇園會圖繪といふことは書肆笹田榮壽堂か新に板刻せしものにておのれにこれが緒言を書きてよと請へ

京都祇園會圖繪

緒言

祇園の會はいと古くより執り行はれて吳竹のよのうつり變るにもかゝはらず今の如く嚴かにしてまして其規式の五月のはじめより六月の末にかけて二ヶ月の長きにわたれるなどは世に類ひなきことならんとそれを觀んとて水無月のあつさをもいとはず遠近より集ひ來る人々其幾千万なるを知らずされど其起原は素より山鉾の名さへも知らぬ人々の多かるは實に遺憾なることなりとて今度これに關することどもをもらさずおとさずまつぶさにあつめしるし名付て京都祇園會圖繪といふことは書肆笹田榮壽堂が新に板刻せしものにておのれにこれが緒言を書きてよと請へ

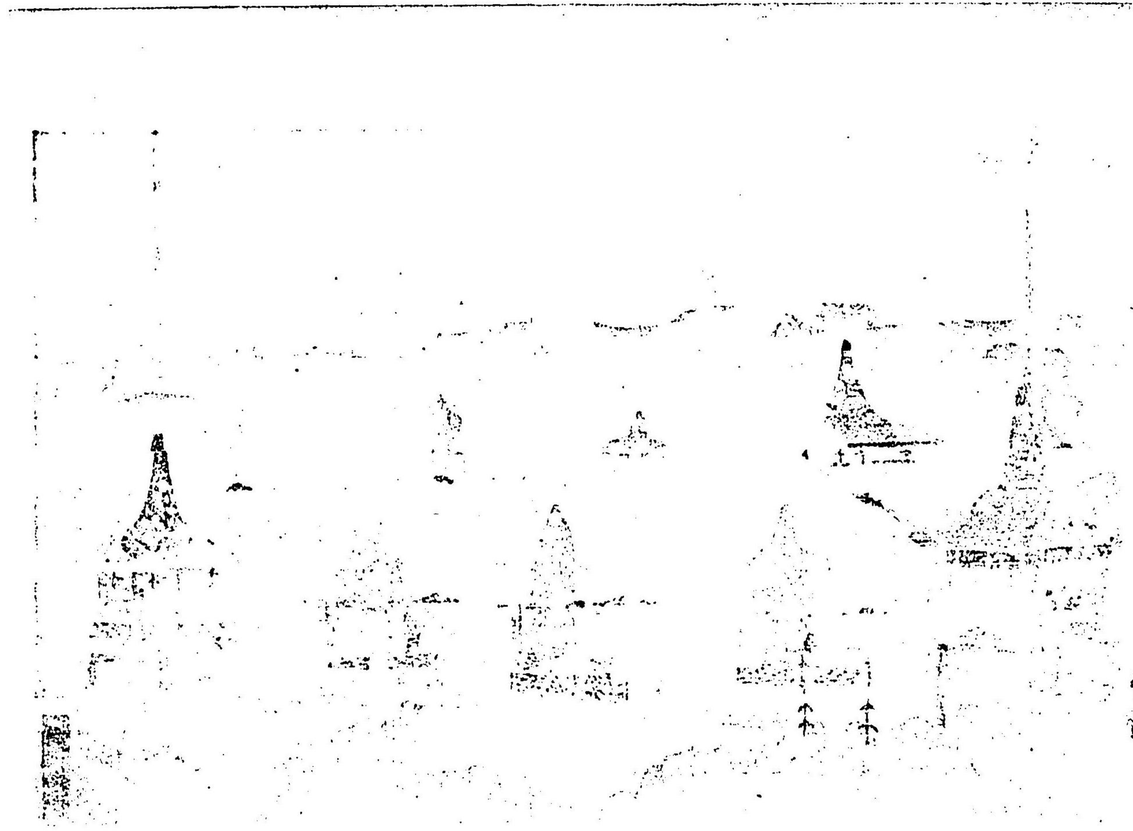
るまゝに一渡り讀渡せしが祇園會の起原山鉾の由來はさらなり總べてこれに因みあるものは悉くあつめしるし殊に其繪圖をさへに挿し加へたれば此祭禮を見ん人はいふまでもなくまだ得見ぬ人々の爲めにもよき便りとなりて大に世に益あるを覺ひたりよりて請ふがまに〳〵一言かきしるしてはしがきとはなしぬ

明治二十六年十二月三十日

士華山人

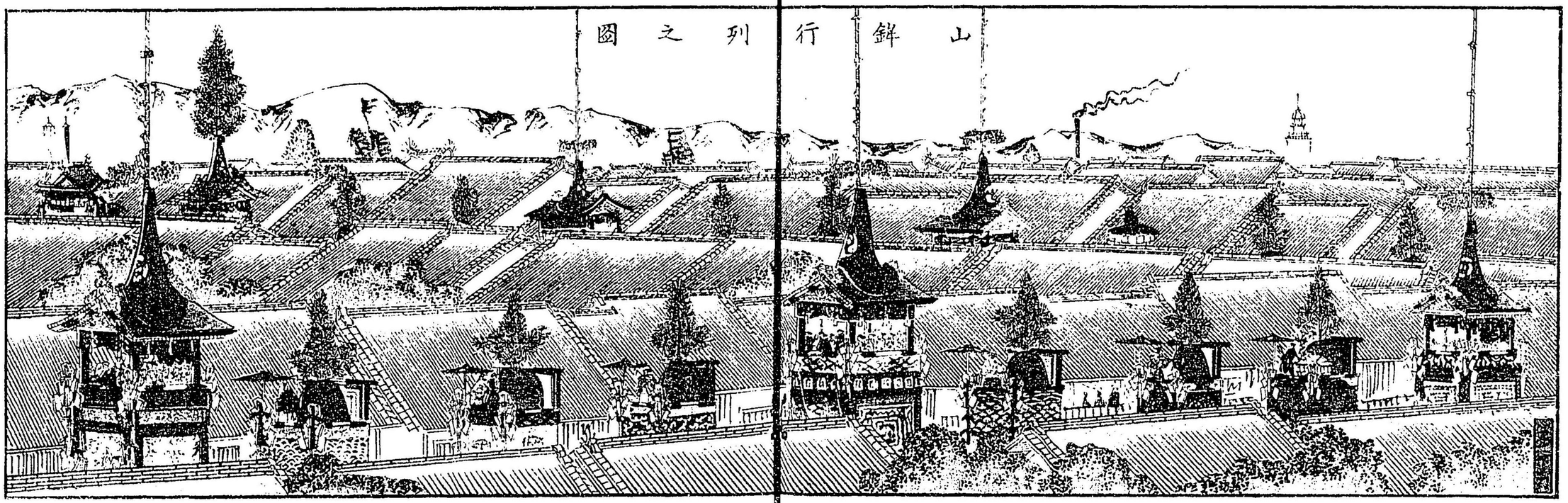
京都祇園會圖繪目錄

祇園會の濫觴……一
致齋の事……一
神事初めの事……一
四條河原の納涼……二
御旅所に齋竹を建つる事……二
御興洗ひの事……二
鉾町人形を拜せしむる事……三
稚兒祇園參りの事……三
花作りの事……三
鉾引初の事……三
手水の井開の事……四
圖取の事……四
宵宮飾の事……四
祇園神事の町々……四
十七日御興迎神事の事……五
山鉾の粧飾及緣起……五
長刀鉾……六
占出山……八
牛天神山……八
太子山……八
函谷鉾……九
白樂天山……九
破琴山……十
郭巨山……十
鷄鉾……十一
山伏山……十一



霰天神山……十二
木賊山……十二
月鉾……十二
蘆刈山……十三
傘鉾……十四
綾傘鉾……十四
菊水鉾……十四
放下鉾……十四
孟宗山……十五
保昌山……十五
蟷螂山……十六
岩戸山……十六
舟鉾……十七
廿四日神幸の次第……十八
御靈會山渡の事……十八
橋辨慶山……十八
鯉山……十九
八幡山……二十
行者山……二十
鈴鹿山……廿一
淨明山……廿二
黒主山……廿二
北觀音山……廿三
南觀音山……廿四
廿四日祭の事……廿四
御輿拂ひの事……廿五

京都祇園會圖繪目次終



山鉾行列之図

京都祇園會圖繪

京都　淺井廣信　著

○祇園會の濫觴

抑祇園會即八坂神社私祭の起因を尋ぬるに古へ八坂の鄕に感神院と稱する一の佛閣あり（八坂と稱するは北は眞葛が原南は清水坂までの總名にして即祇園坂長楽寺坂下河原坂法觀寺坂靈山坂山の井坂清水寺坂三年坂等なり後世此邊りを稱して祇園と曰ふ）此所に牛頭天皇（素盞嗚尊以下二社）を奉祀す即八坂神社（官幣中社）なり彼後白河法皇の寵姫祇園の女御のありしは此邊りなり今祇園會といふは人皇五十六代清和天皇の御宇貞觀十八年疫神大に崇をなし洛中の男女其災に罹るもの頗多し此時に當て卜部家の祖日良磨洛中の老少男女を率ゐ鉦太鼓を打ち鳴らして疫神を神泉苑に送る（神泉苑は今の二條離宮の南にあり此邊古は大なる森林にして樹木鬱蒼し大藪所々に散在せり）即六月七日（今は七月十七日（同じく十四日）今は七月二十四日）の兩日なり其翌年も亦同じく爾後以て例となす是れ祇園會の濫觴にして初めは之を御靈會と云ふ後神輿を設け次第に盛大に赴き遂に今日に至れり其御靈會の名あるは人皇六十四代圓融帝の天祿元年に始まる後應仁建武の戰亂により暫中絶せしが人皇七十五代崇

德天皇の天治元年より舊儀に復せり又今を距る三百餘年前織田信長公大に當社を尊信し社殿を修築す依りて當時に至る迄祇園の紋章に三つ巴と瓜とを並び用うるは瓜ハ此公の紋章なればなり舊記を按ずるに六月七日を御興迎ひと云ひ十四日を御靈會と稱せり當時は山鉾を大内裏に迎へ入れ又は殊更に行幸叡覽ありし事あり故に維新前多くの雜色警衛せしは其古例を存するなり又足利時代に於ては將軍鎌倉より故らに上洛して之を見し事あり六月七日（今の七月十七日）神興を四條京極の御旅所に神幸し仝十四日（今の七月二十四日）本社に還幸の例なり

○致齋の事

祇園會の始めに當りて致齋といふ事あり五月朔日より榊を建つること是なり朔日の朝未明に祇園より榊を運び送る此を建つる處數ヶ所あり即祇園の西門青蓮院門前及氏子町の中處々の辻に建つるなり此日祇園神社に於て祈禱太神樂を奏す

○神事初めの事（俗に吉符入といふ）

五月廿日（今は六月三十日）始めて祇園會の儀式を行ふ擔任の雜色四座五十嵐氏萩野氏松村氏松尾氏各部下を率ゐて祇園の執行寶壽院に會合し神祭の事を議して後同處に於て宴を設けて饗應をなす毎年古例に違ふことなしそれより四條東洞院の辻に至り長刀鉾町の行事出迎ひ之が指令を承く即近時は此例を見ず此日鉾町にては會所の二階に於て囃の稽古を初む之を囃初と云ふ

○四條河原の納涼

四條磧の納涼は最古くして其起因を知るによしなしと雖數百年の昔よりありし事は古書に散見せり古は四條磧に各出店を設け多くの婦人は頭に臺の如きものを戴きて各自恰好の場所を見立て其處に臺を据ゑて上に物を併べ賣るなり初は尤些の物を賣り居りしものなるが追々に擴がりて或は床几の大なるを運び丸行燈を點じ近世の如き繁昌を極めしは延寶享保の頃より起れり兩岸の川端より掛出しを設け或は水淺く流れ清き處に涼棚を架して客を呼ぶあり或は水中に足を浸して杯酒を擧ぐるあり或は舞妓の手を携へて逍遙涼を納るゝあり或は調馬場に鞭聲を鳴らすあり或は釣魚場に魂を奪はるゝあり或は妓樓に起て踊るあり或は牀上に醉ふて謠ふあり笑語喃々醉步蹌踉輕羅は風に颺つて蘭麝の香り濃に娥眉は月を學びて紅顏更に嬋に纖手は雪を欺いて糸竹の調嬝なり豁然聲急にして立に[illegible]劣敗を爭ひ歌舞宴酣にして頻に富貴豪遊を競ふ等老幼貴賤各其好樂を異にすと雖すべて皆消夏の遊興ならざるはなし萬點の紅燈明なること晝の如く幾多の遊客夜の更くるを覺ぬずさしもに廣き四條磧も爲に立錐の地なきに至る其繁華なる實に名狀すべからず毎年七月

一日に始め八月卅一日を以て終る此地祭禮の中心なるを以て此間殊に繁昌なり

○御旅所に齋竹を建る事

當社御旅所は古佛光寺通の西端なる壬生寺の邊りにありしが其後圓融帝元延二年烏丸高辻の邊りに移し又烏丸錦小路の邊りに遷す卽此處神事に供する清泉のあるありて今尙存す四條京極（現今の地）に移したるは豐太閤の時に始まる五月二十九日（今の七月九日）の夜深更に及び四條御旅所に齋竹を建て七五三繩を引廻し榊を飾る齋竹の長きは烏丸の佛光寺大政所町より短きは祇園本社より建るを例とす少將井天皇神輿舍の七五三繩は因幡堂よりし官舍殿と神樂所の間に建つる齋竹は東洞院の佛光寺高橋町上柳町よりす又御旅所寺町の角に建つる齋竹二本あり其一は御旅所藤井氏より又一は泉涌寺中來迎院より建つ是卽惡王子社の七五三繩にて惡王子社は泉涌寺の支配する所なればなり此社古四條東洞院にありし頃其七五三繩を長刀鉾巡行の時切て通行せし例あるを以て今に此事を行ふ

○御輿洗ひの事

古は五月晦日之を行ひしが近時は七月十日に行ふなり今夜氏子總代並に世話方大なる松明を携へ四條橋の中央に至りて神輿を迎ふ此際種々の裝飾したる提燈を出して之を迎ふるなり俗に是を御迎提燈と云ふ其松明を携へたるもの本社に着するやいなや四本の松明を前後に備へ一基の神輿を四條橋の正中に奉じ神官一人榊を清水に浸して以て御輿洗ひの式を行ふ式終れば神輿還幸す此時祇園町より練物を出したるが現時は之に換ふるに其翌十一日祇園町末吉町富永町等の舞妓之を行ふ卽先行燈と稱して長方形の行燈を掲げて行く續いて數名の舞妓烏帽子水干を穿ち三弦を携へながら之れに隨行す次で前囃しと稱して屋臺に種々裝飾して鉦太鼓の囃をなし以て練り行くなり數名の舞妓又は歌妓種々の化裝す之を練子と稱す次に屋臺を引く之を後囃と云ふ又此前後に飾臺を持たしめて練出せり此飾を見んが爲來り集まるもの其幾千萬なるを知らず宛人頭の山を築きて立錐の餘地だも更になし

○鉾町人形を拜せしむる事

五月晦日（當時は七月十日）鉾町に於ては鉾に載する人形を出し衆人に參觀せしめ其翌日より鉾を組立つるを例とす

○舞兒祇園祭りの事

古は六月朔日近時は七月十一日各鉾町の舞兒列を正して本社に參詣す其行列は古諸侯の格式に擬し天和の頃迄長柄を持たせ帶刀にて列をなす其後世絕せしが又舊に復し近時は金紋先箱にて行列し美々敷社參をな

す 即 古十万石以上の諸侯の格式に準ずと云ふ此日早天本社に於て神輿の飾付をなす之を觀んが爲遠近の老少茲に群集す

○花作りの事

往時六月三日夜作りと稱し各鉾町に於て鉾の屋根に出す飾花を製するの例あり其景況を左に掲ぐ

長刀鉾の飾花は　手珠花の根元を扇にて隠し正面に鐵仙の風車あり

函谷鉾の飾花は　金の菊本に函の字書きたる堰臺あり

鶏鉾の飾花は　金の牡丹を茶巾袋に入れ眞紅の大總を掛く

月鉾の飾花は　堰臺に生へる堰臺の畫は獅なり花は金箔の牡丹羽二重の牡丹紅牡丹葉は總金かきつばた花は紫葉は總金

放下鉾の飾花は　牡丹と菊總金にて作る根元に花車あり轅一間程出る此車黑繻子にて作る舞車あやつりなり

以上擧ぐる處のものは近時絶えて出さず

○鉾引初めの事

六月五日（今の七月十五日）此日初めて山鉾を曳き其町々を廻るを例とす

○手水の井開きの事

前に記する如く古へ烏丸に祇園御旅所ありし時の神水今尚烏丸通り錦小路の北東側にあり此井平素は戸を閉して衆人に用ゐしめず其祭禮前日（往古は六月六日今は七月十六日）水ざらへの式をなし其翌日神輿本社を發すると其に之れを開き仝月廿四日迄（往古は六月十四日迄）之れを衆人に飲用せしむ其十四日神輿還幸の時之れを閉ず

○鬮取りの事

往昔は六月六日明六時六角堂に於て山鉾巡行の順番を鬮を以て定む即四座の雜色（前にあり）例により鬮を受取り山鉾町の總代に渡すなり其中長刀鉾函谷鉾放下鉾岩戸山舟鉾のみは鬮をとらず之れは例年順次定まりあるを以てなり往昔天皇叡覽の時各町々六十有餘の鉾先を爭ふて喧嘩せしより起るとぞ現時は七月某日京都府廳に於て上下京の區長鬮をとり各町總代に渡すこと毎年遂ふことなし

○宵宮飾りの事

俗にこれを宵山と云ふ六月六日（今は七月十六日）仝十三日（今は七月廿三日）の夜神事の町々に於ては軒毎に神燈を掲げ各幔幕を張り金銀書畫の屏風を建て廻らし或は珠簾を垂れ花瓶を飾き銀燭硝燈を點じ或は生花或は盆栽を陳列し以て來賓を饗す元來祇園會氏子の

町々たる京都屈指の繁華の地にして其祭日の壯飾の如き器には金銀珠玉を鏤め衣には時樣の綺羅を飾り各美を競ひ麗を爭ふ其壯觀美麗實に人目を驚かすこれを觀んが爲に遠近より來り集るもの其幾千萬なるを知らず就中山鉾町々の如きは頗雜踏を極む實に天下の奇觀といふべし此日正式の囃子をなし且山鉾の人形を拜覽に供す

○祇園神事町々

七日祭りの地（今の十七日）東は山を限り八坂迄又加茂川より東智恩院新古門前北は繩手通りにては大和橋迄河原町は蛸藥師通りを限り寺町は四條の辻を限り夫れより西烏丸通り迄蛸藥師通りの南側を限り烏丸より西は十四日（今の廿四日）祭りなり又新町通りより大宮通りの西迄錦小路南側を限る大宮通りは松原通りより皆十四日（今の廿四日）の神事なり右の內新町四條下る町は十四日（今の廿四日）の舟鉾を出す故に七日（今の十七日）の神事をなさず十四日に之を勤む又佛光寺通り新町西入町菅大神社高辻室町西入町繁昌社高辻西洞院西入町西洞院高辻下る町五條天神の地等は七日祭りの地にありと雖別に其社の神事を行ふ十四日の祭地は東は三條通り栗田口境河端は孫橋上る町迄木屋町河原町より初め西は二條城を限り（今の二條離宮）北は二條通り南側より蛸藥師通りの北側迄又室町二條

上る町東側片側計り十四日の祭なり今は神事の月日さへ變更したれば神事の町々も如何に變更しあるか調を遂げざれば判然し難しと雖茲には古書に載する處及古老の口碑に傳ふる處のものを擧げて以て讀者の參考に供す

○七日御輿迎ひ神事の事

七日祭り（今の十七日）則御輿迎ひにして往時は六月七日卯の刻四座の雜色六角堂に集り長刀鉾町と前後に使者の往復をなし尋で鉾を引出す乃ち雜色は四條通り高倉東入る處の南側に於て床机に倚り（此所古へ公武家の觀覽せし所なり）長刀鉾の高倉を過る頃前日渡し置たる圖を受取り之れより順次に鉾一本に山三輛づゝ巡行す此所に於て傘鉾の赤熊鬼が棒振りの曲を演じ蟷螂山は蟷螂の羽を廣げ臂を動かさしむ四條京極の辻に於けるも亦此の如し是れより悉く四條を南寺町に寺町を南松原に松原を西へ東洞院迄世人此處を戻り鉾と云ふ則ち松原東洞院の辻に於て分列し各其町々へ歸るなり雜色等は山鉾渡りて後四條道場金蓮寺に於て休憩をなす鉾の其町へ歸りし後舞兒祇園社へ詣づ前日の式の如し現時其異なる處は祭日は七月十七日にして其圖渡しは上下兩京區長之を執行す

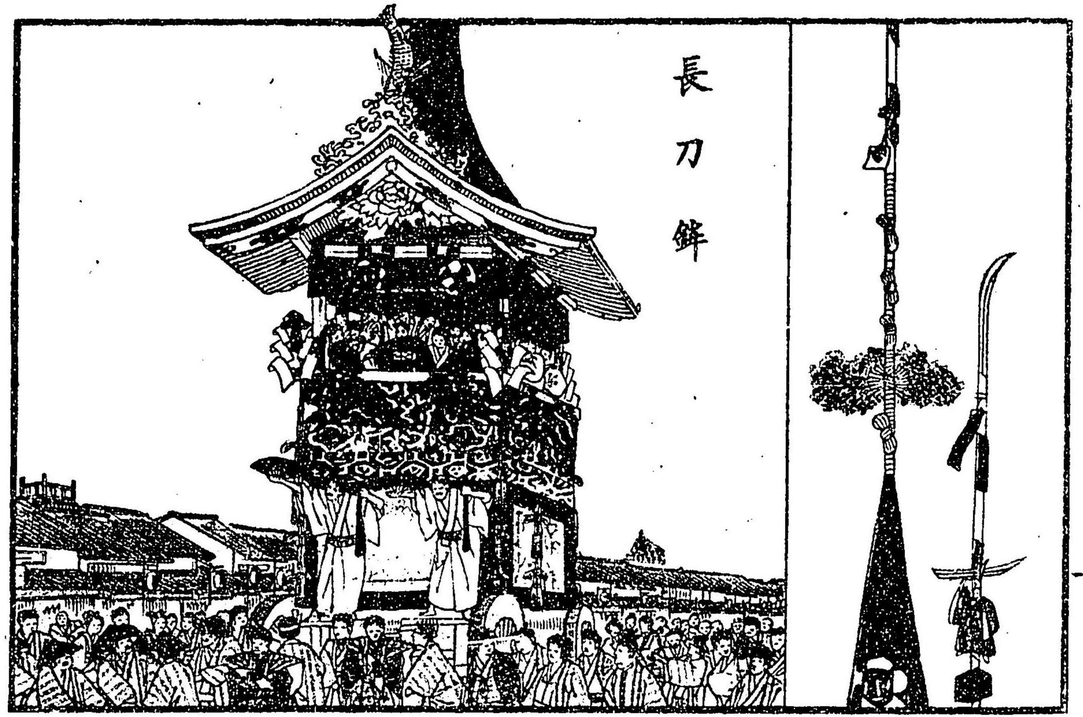
○凡例

山鉾の記事頗る繁多なれば是を飾付奇瑞緣起古例寄町

等に分類し以て讀者の爲め見易からしめむことを務む

○飾り付の部

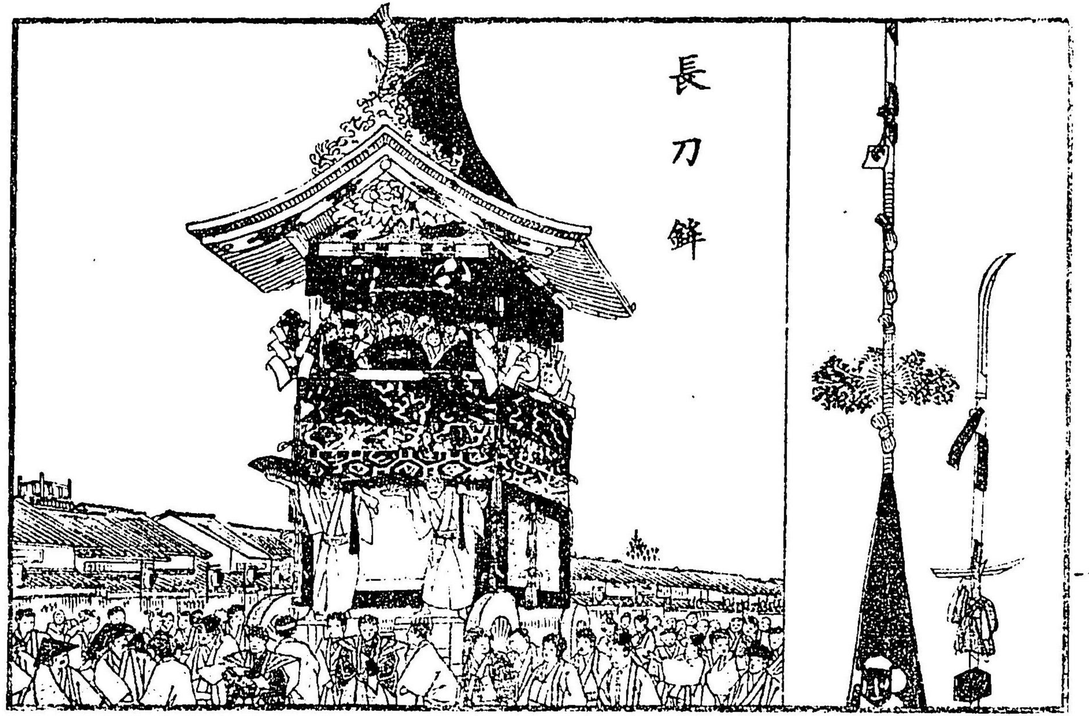
（鉾頭）鉾の頂上に在る出しを云ふ其形種々あり（小幡）子持筋或は窠巴等の紋を付けたり其形長し（小屋根）人形の上にある屋根を云ふ（人形）其形各異なるを以て本文に譲る（人形棚）人形の下にありて角なるもあり又舟形のものもあり此棚の上に直ちに人形を載すれば車際より見ゆるが故棚と人形との間凡そ一二尺計りを隔てあるが故鉾の下より望み見て棚に人形のあるを認む何れも下に幕を引回し窠巴の紋章又は浪の類を畫く（大幡）子持筋窠巴の紋章あり其形方形にして大なり但し鉾によりて小幡は方形にして大幡は長方形なるもあり又大幡を上に掛け小幡を下に掛け或は小幡一枚掛るもありされども其位置は違ふ事なし（蟬車）網頭眞木の脇にあり（網隠し）大幡と大屋根との間にあり赤地に染め窠巴の紋を付け上に黒の赤熊を付す眞木より四角の柱へ筋違なる木を四本入れて其上に網を掛け尚其上に掛くる絹を云ふ（大屋根）軒に花破風又唐破風等の飾あり是等は鉾に依り種々異なる所ありと雖も何れも同樣の物故委くは記さず（天井幕）鉾四本柱の内天井にあり鉾又引山等の屋臺の上にあるを云ふ（上水引）鉾大屋根の軒に引き又引山舟等の屋臺の軒に引きたる幕を云ふ（下水引）山鉾とも高欄の下に引回したる幕を云ふ引山

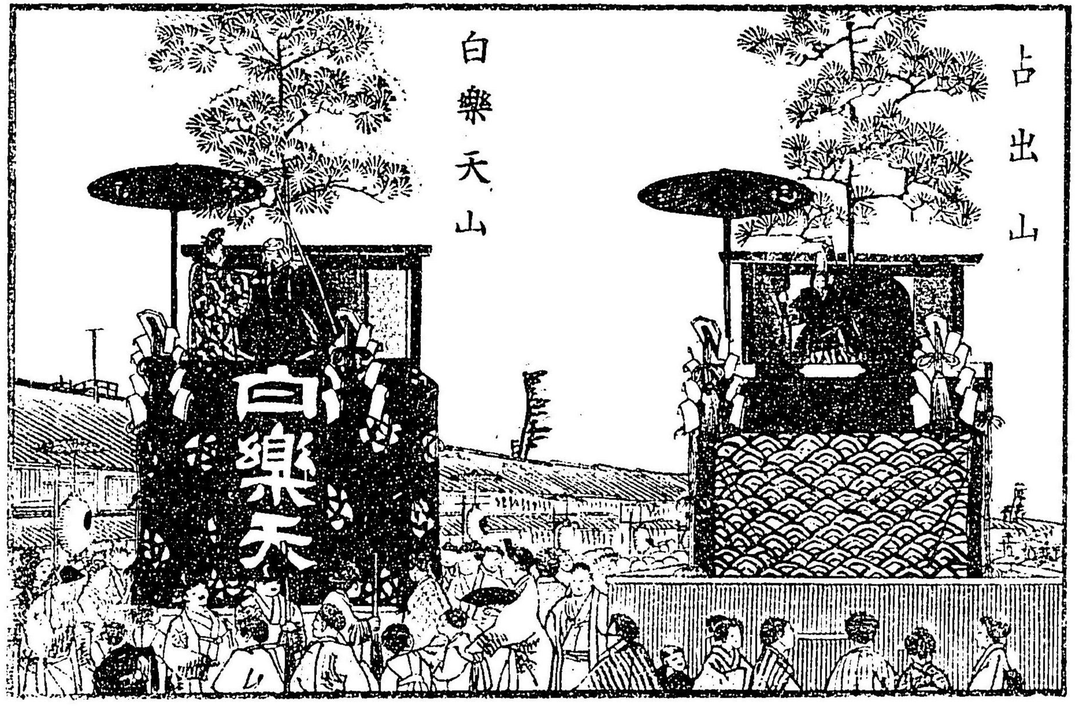


等に分類し以て讀者の爲め見易からしめむことを務む

○飾り付の部

（鉾頭）鉾の頂上に在る出しを云ふ其形種々あり（小幡）子持筋或は窠巴等の紋を付けたり其形長し（小屋根）人形の上にある屋根を云ふ（人形）其形各異なるを以て本文に譲る（人形棚）人形の下にありて角なるもあり又舟形のものもあり此棚の上に直ちに人形を載すれば車際より見ゆるが故棚と人形との間凡そ一二尺計りを隔てあるが故鉾の下より望み見て棚に人形のあるを認む何れも下に幕を引回し窠巴の紋章又は涙の類と畫く（大幡）子持筋窠巴の紋章あり其形方形にして大なり但し鉾によりて小幡は方形にして大幡は長方形なるもあり又大幡を上に掛け小幡を下に掛け或は小幡一枚掛るもありされども其位置は違ふ事なし（蟬車）網頭眞木の脇にあり（網隠し）大幡と大屋根との間にあり赤地に染め窠巴の紋を付け上に黒の赤熊を付す眞木より四角の柱へ筋違なる木を四本入れて其上に網を掛け尚其上に掛くる絹を云ふ（大屋根）軒に花破風又唐破風等の飾あり是等は鉾に依り種々異なる所ありと雖も何れも同樣の物故委くは記さず（天井幕）鉾四本柱の内天井にあり鉾又引山等の屋臺の上にあるを云ふ（上水引）鉾大屋根の軒に引き又引山舟等の屋臺の軒に引きたる幕を云ふ（下水引）山鉾とも高欄の下に引回したる幕を云ふ引山





の外山には上水引を用ざる故只水引と云ふ鉾にてはみたしとも云ふ山にて高欄廻廊等の下幔幕計りにて水引を掛けざるもあり（二番三番）凡そ二番まで掛る鉾にては四番まで水引を掛ける事あり（前羅）鉾の正面に掛ける幕を云ふ或は前掛とも云ふ山の部にては幔幕計りを掛け前羅なきもあり（胴巻）左り右に掛ける幕を云ふ一方に三枚づゝあり但し放下鉾の如きは花毬大なる故一方ゑ只一枚掛けたり引山は凡て胴巻あれ共も其他の山は大概幔幕計りを掛る（胴幕）凡そ鉾引山等胴掛けの下掛は横引の幕なり布木綿等を染めたるもあり（胴幕）松の根を包む洞の上に掛る幕なり凡そ猩々緋緋羅紗等の類を用ゆ

飾付は近年用ゆる處のものを記すと雖も其時の行事の意見にて配色の取合せに年々異同あり飾付の幕或は花毬の類各町々に幾通りもあり依て雨中の時は掛替へを用ゐ又曳初め宵山等の飾を異にするあり今茲に記するものは當日の大略なり

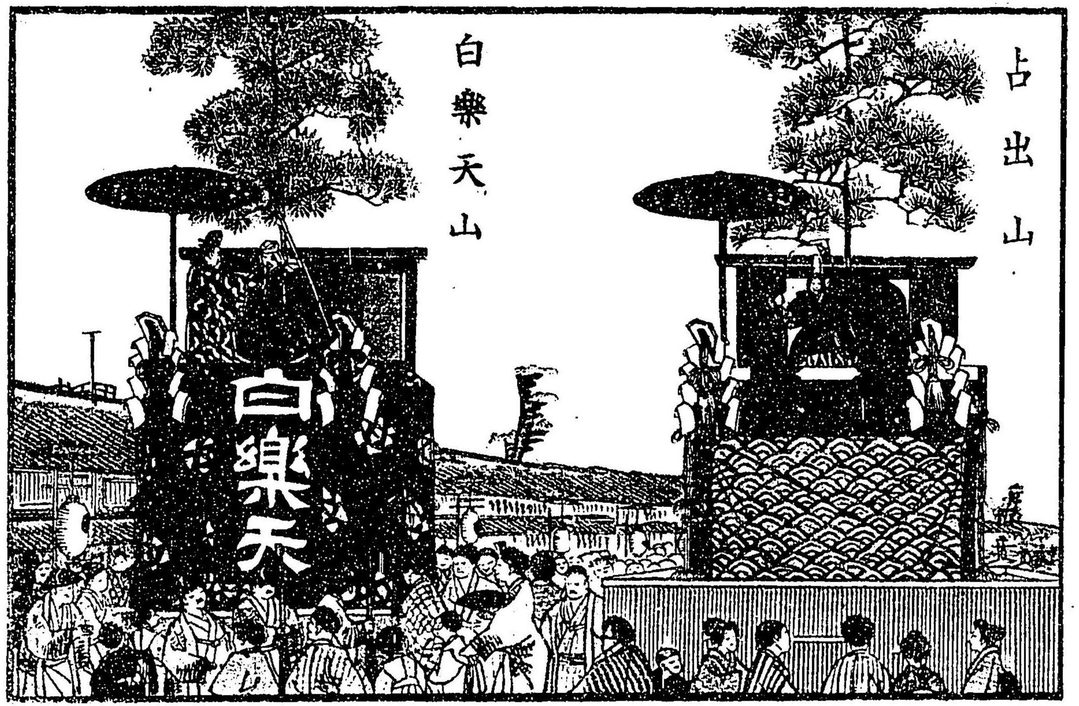
○縁起奇瑞の部

縁起奇瑞の如きは各山鉾の條に譲り此處には記さず

○長刀鉾

四條通り東洞院西入長刀鉾町より出る

（鉾頭）小鍛冶宗近が作の長刀なりしが今は用ゐず當今用ゆる長刀は和泉守金道大法師榮仙合作なり



の外山には上水引を用ざる故只水引と云ふ鉾にてはみだしとも云ふ山にて高欄廻廊等の下幔幕計りにて水引を掛けざるもあり（二番三番）凡そ二番まで掛る鉾にては四番まで水引を掛ける事あり（前毬）鉾の正面に掛ける幕を云ふ或は前掛とも云ふ山の部にては幔幕計りを掛け前毬なきもあり（胴巻）左り右に掛ける幕を云ふ一方に三枚づゝあり但し放下鉾の如きは花毬大なる故一方ゑ只一枚掛けたり引山は凡て胴巻われども其他の山は大概幔幕計りを掛る（胴幕）凡そ鉾引山等胴掛けの下掛は横引の幕なり布木綿等を染めたるもあり（胴幕）松の根を包む洞の上に掛る幕なり凡そ猩々緋緋羅紗等の類を用ゐ

飾付は近年用ゆる處のものを記すと雖も其時の行事の意見にて配色の取合せに年々異同あり飾付の幕或は花毬の類各町々に幾通りもあり依て雨中の時は掛替へを用ゐ又曳初め宵山等の飾を異にするあり今茲に記するものは當日の大畧なり

○縁起奇瑞の部

縁起奇瑞の如きは各山鉾の條に譲り此處には記さず

○長刀鉾

四條通り東洞院西入長刀鉾町より出る（鉾頭）小鍛冶宗近が作の長刀なりしが今は用ゐず當今用ゆる長刀は和泉守金道大法師榮仙合作なり

（長刀の由來并に奇瑞）　此の長刀は貞觀年中疫病流行せし際三條小鍛冶宗近の愛女も其病に罹り一命も殆んど危ふかりしを小鍛冶甚く之を愛憐しいかで此病平愈せば太刀を鍛練して奉納せむと祇園社に祈誓せしに其病愈しかば甚く喜びて草薙の御劍に形どり心を籠めて打鍛へ洛東感神院へ奉納せし長刀なり其后元暦文治の頃日蓮宗の僧徒亂を起せし時和泉小次郎親衡追討の命を鎌倉より受けしが身に適する太刀のなきを遺憾に思ひ此の感神院に藏せる長刀は小鍛冶の作なるを聞き之を借りて追討に向ひしに更に武用に立たざりければ是は神器にて武器に用うべき物にあらずとて其長刀の中心に「甲州住人和泉小次郎親衡奉返納之」と彫付て再び感神院に返納せり其後人皇百五代後柏原天皇の御宇大永二年京都に疫病流行して之が爲め死する者其數を知らず或人祇園の社に祈禱を乞ひ寶劍を借受け疫病瘧病邪祟狐狸の妖をなすの類に頂かすれば一人も平癒せざる者なし其應驗の速なるを貴び之を止めて尚靈驗を祈る其地は則ち今の長刀鉾町なり其後天文法亂の項此亂に乘じて野武士强盜洛中を横行し寶財を奪ひ去る内に此長刀を掠めて持ち行きしが神威に恐れけむ路傍に打捨て有りしを石塔寺の邊なる鍛冶左衞門助永が拾ひ擧げて我家に祕め置しが星霜を經て感神院の寶物たる事を確知し之を奉還せり此時にも助永返納せし旨彫刻せりと云ふ其後ち織田信長公祇園會再興の際神職を召して神事の舊式祭禮の所以を委しく尋られしに神官長刀の由來をも言上に及ぶ故に信長公之れを裁許し名劍の奇瑞を貴び舊地に下げ渡し大切に守護致すべき樣命を下す依て此町永世の重寶となり再興第一番の鉾となれり此寶劍常は町裏の庫中に納むと雖も例年六月朔日（今は七月十一日）より衆人に拜覲を許す

緣起

棚の上の人形は和泉小次郎親衡なり此人强力勇壯万人に過ぐ建暦三年故ありて驚與拾餘人終に虜となる工藤某親衡が隱れ家を探して捕へむとす親衡工藤を殺して去る終に其所在を知らず或は大舟を負ふて水陸を上下すと云ふ此人形に於て謂わりと雖も暫く之を畧す此人形長刀を左りに持ち舟を右に差上げ武烏帽子に古代唐織の直衣大口を着用せり

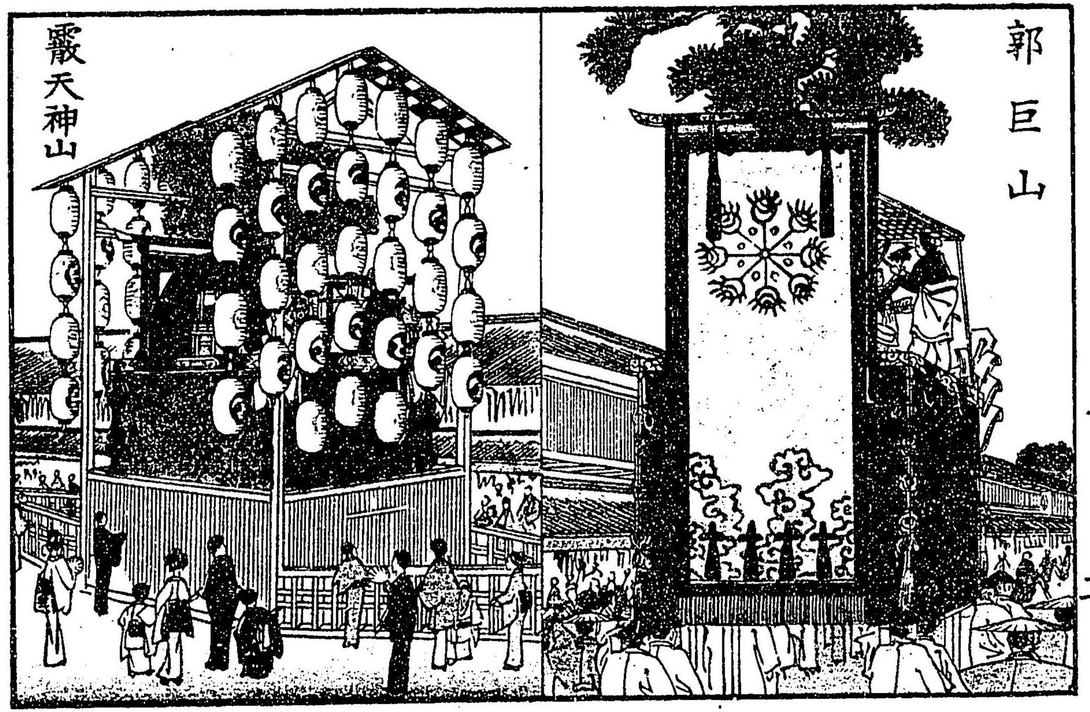
飾り附

（外天井裏）水鳥と山鳥との畫き分け景文の筆（破風裏）孔雀と鶴と裏表に畫けり景文の筆にて珍しき物なり（内組天井）猩々緋に二拾八宿の金具を打つ（兩桁）葡萄の金物（四本柱）唐松浮彫の金物（欄緣）三十六禽の彫金物（上水引）花色地青龍白虎朱雀玄武の摸樣にて巳上の飾り付けは大に注意せしものなりと云ふ（下水引）猩々緋唐縅麒麟の摸樣（二番水引）花色

地唐織色を分けて三枚掛くる（三番水引）地織蜀紅錦（前蹠）和闐陀古渡りの毛氈緣猩々緋（古見送り）花色縷り金の紅登り龍下り龍緣猩々緋（胴卷）三方とも毛氈緣猩々緋（新送見り）唐織綴れの錦花鳥の模様幣四方に出す

○古例

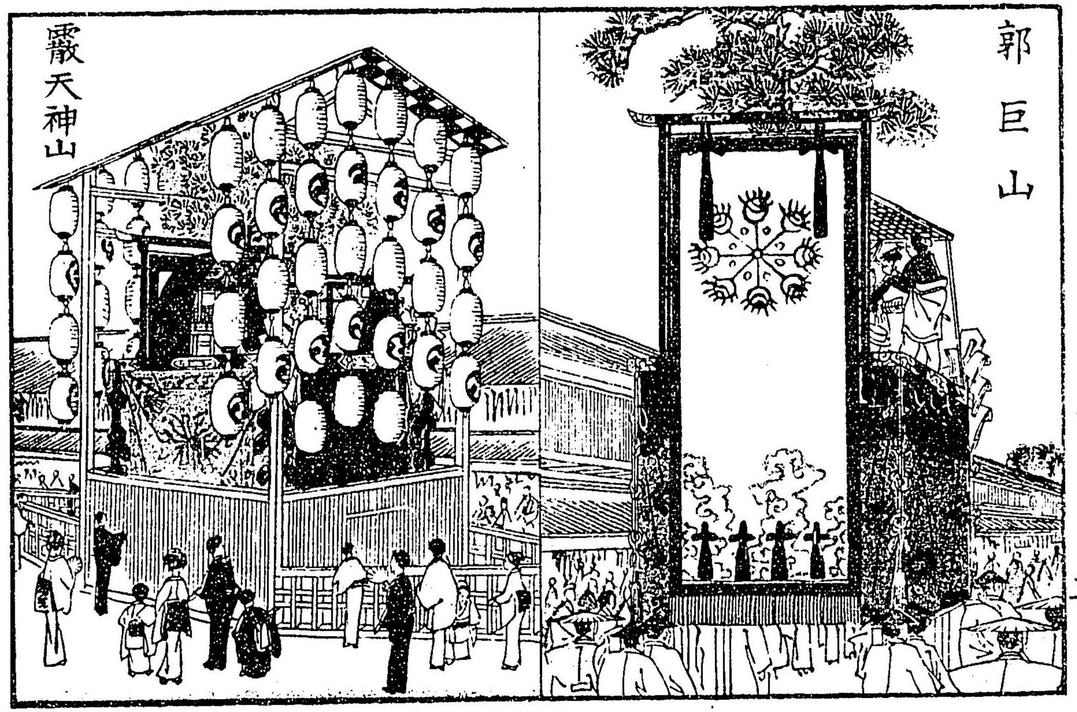
此鉾四條の街を東へ向うと雖も長刀の鋒先きを南の方に向はしむ之れ則ち皇居と社頭を恐れて東北の二方を除くの意なり長刀鉾四條御幸町の辻に至れば暫く巡行を止めて行事番の人御旅所に至り忌竹の注連縄を切るなり此の例俗説に古へ小鍛冶が作の長刀影映りて七五三縄を切ると云ふと雖も全く左にあらず古へ御旅所烏丸の邊にありし頃四條、東洞院の辻に惡王子の社ありて是亦六月七日神事にて齋竹を建注連縄を引きけるを切て通りし故御旅所京極の辻に移りし後も尚古例に依て之を行ふなり又鉾松原通柳馬場東入町に至れば其町より薄茶を水だてにして隨行者を饗す又三方に神酒を載せ鉾に供ふ隨行の人々之を頂戴す三方の飾りは眞中に松を植ゑ根元を荒和布にて卷き其元に土器を二枚と車海老楊梅杏子梅等の三果あり是等の品々其氣候に依り稍得難き物ありと雖も鹽製にして平常貯へ置き其料に供し更に餘果を用ゐず又其年の行事に當る人三方の松を飾る日其恙なきを祝し其町の人々を饗するに酒

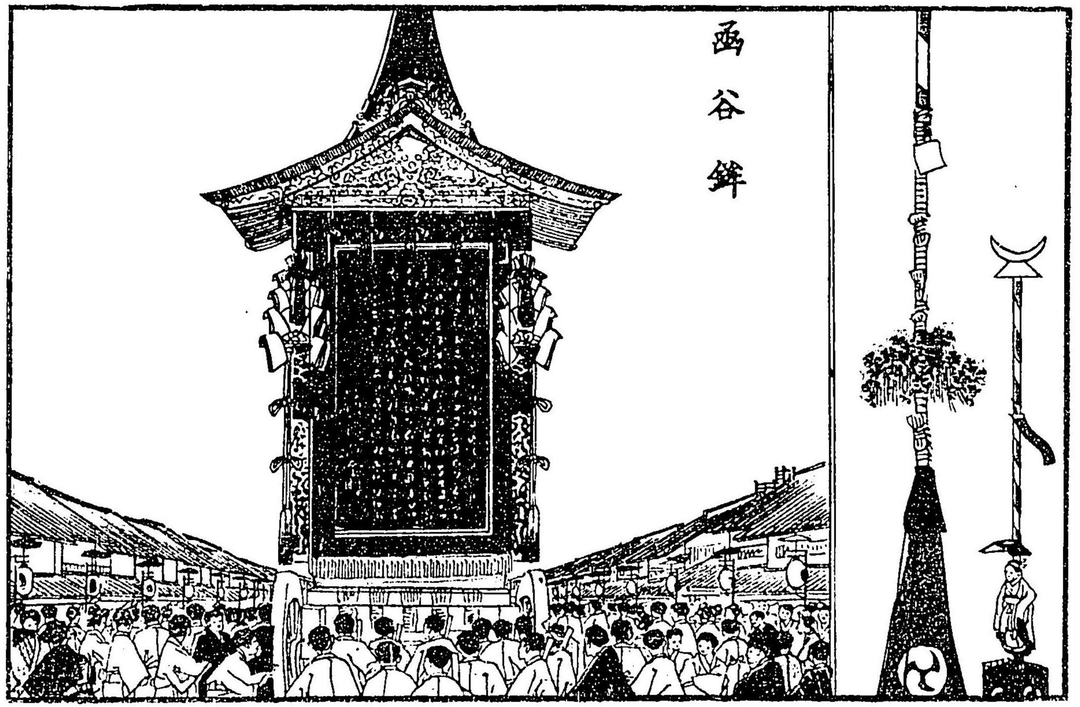


地唐織色を分けて三枚掛くる（三番水引）地織蜀紅錦（前庭）和蘭陀古渡りの毛氈絲猩々緋（古見送り）花色縷り金の紅登り龍下り龍絲猩々緋（胴巻）三方とも毛氈絲猩々緋（新送見り）唐織綴れの錦花鳥の模様幣四方に出す

○古例

此鉾四條の街を東へ向うと雖も長刀の鉾先きを南の方に向はしむ之れ則ち皇居と社頭を恐れて東北の二方を除くの意なり長刀鉾四條御幸町の辻に至れば暫く巡行を止めて行事番の人御旅所に至り忌竹の注連繩を切るなり此の例俗説に古へ小鍛冶が作の長刀影映りて七五三繩を切ると云ふと雖も全く左にあらず古へ御旅所烏丸の邊にありし頃四條東洞院の辻に悪王子の社ありて是亦六月七日神事にて齋竹を建注連繩を引きけるを切て通りし故御旅所京極の辻に移りし後も尚古例に依て之を行ふなり又鉾松原通柳馬場東入町に至れば其町より薄茶を水だてにして隨行者を饗す又三方に神酒を載せ鉾に供ふ隨行の人々之を頂戴す三方の飾りは眞中に松を植ゑ根元を荒和布にて卷き其元に土器を二枚と車海老杨梅杏子梅等の三果あり是等の品々其氣候に依り稍得難き物ありと雖も鹽製にして平常貯へ置き其料に供し更に餘果を用ゐず又其年の行事に當る人三方の松を飾る日其意なきを祝し其町の人々を饗するに酒





俵を以てす是又當町の古例とす往古は此鉾に限る事なく何れの山鉾にても警衛の人々帶刀をなし長柄の鎗を持たせけるとなり天和年間より其跡を絶てり然れども其町々に今以て筒鞘の穂鎗を所持する處もありと云ふ寄町之を習す

○占出山

俗に鮎生女郎山とも云ふ

錦小路烏丸西入る占出山町より出づる（人形）神功皇后の尊躰なり衣裳小袖金地松に雪の繍長絹萠黄地紗金紅地錦の水干を着し大口袴に石の帶頭に金の烏帽子を被り太刀を帶び左りの手に釣緒鮎右の手に釣竿を持つ

縁起

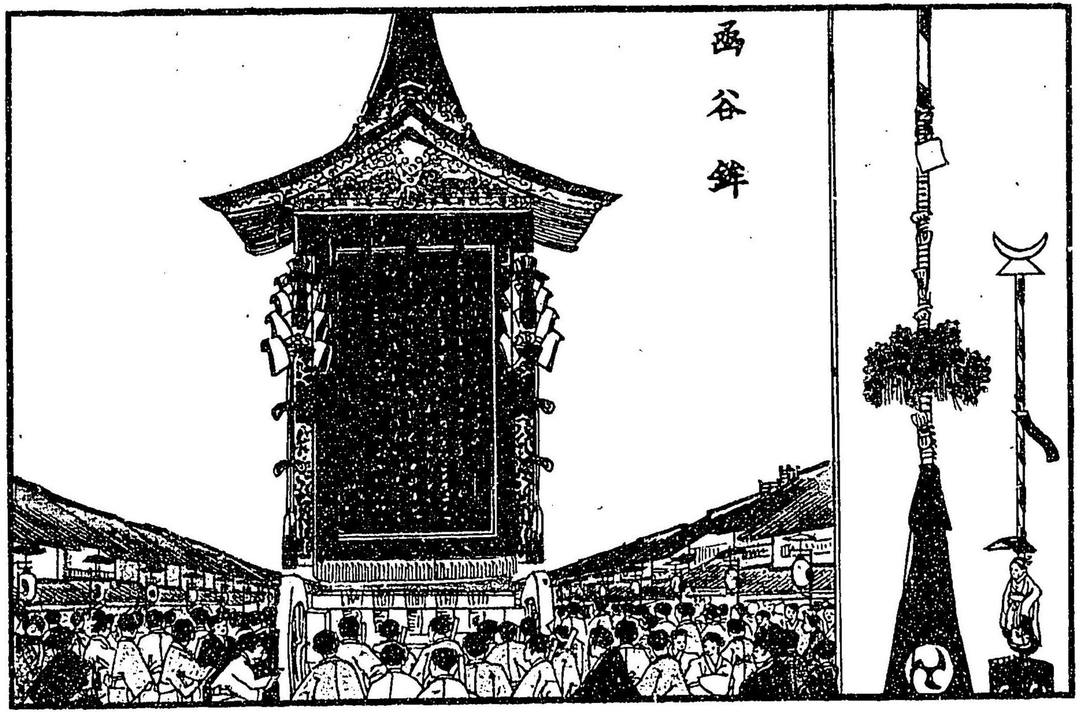
此御姿は日本書記に出たり備前の國松浦川に於て釣を垂れ鮎のかゝりたるを勝軍の吉兆なりと祝し以て出軍を促がし給ふの躰なり占出すと云ふ稱ならむ

飾り附

（水引）猩々緋水に鮎の繍（前掛）錦地織模様（胴巻）地織金地に仙人の模様（見送り）地織綴の錦花鳥の模様（古前掛）天鵞絨に龍の模様緞黒天鵞絨（古見送）唐織錦花鳥模様

古例

六月四日（今は七月十四日）より神事の朝迄其町會所の座敷に尊躰を安置し供物獻上物を飾り置き諸人に拜觀を許す誠に世の恭敬之に過ぐるはなく其清淨を旨



飯を以てす是又當町の古例とす往古は此鉾に限る事なく何れの山鉾にても警衛の人々帶刀をなし長柄の鉾を持たせけるとなり天和年間より其跡を絶てり然れども其町々に今以て筒鞘の穂鉾を所持する處もありと云ふ寄町之を畧す

○占出山

俗に鮎生女郎山とも云ふ

錦小路烏丸西入る占出山町より出づる（人形）神功皇后の尊躰なり衣裳小袖金地松に雪の繍長絹萌黄地紗金紅地錦の水干を着し大口袴に石の帶頭に金の烏帽子を被り太刀を帶び左りの手に釣緒鮎右の手に釣竿を持つ

緣起

此御姿は日本書記に出たり備前の國松浦川に於て釣を垂れ鮎のかゝりたるを勝軍の吉兆なりと祝し以て出軍を促がし給ふの躰なり占出すと云ふ稱ならむ

飾り附

（水引）猩々緋水に鮎の繡（前掛）錦地織模樣（胴巻）地織金地に仙人の模樣（見送り）地織綴の錦花鳥の模樣（古前掛）天鵞絨に龍の模樣緣黑天鵞絨（古見送）唐織錦花鳥模樣

古例

六月四日（今は七月十四日）より神事の朝迄其町會所の座敷に尊躰を安置し供物獻上物を飾り置き諸人に拜觀を許す誠に世の恭敬之に過ぐるはなく其清淨を旨

とするや他の山鉾の比にあらず

○牛天神山

油小路綾小路下る所より出る俗に之を油天神と云ふ

縁起

此山は天満宮を勧請し奉つるなり牛天神と云ふは一説に村上天皇の御宇天暦元年六月九日遷座あり此日丑に當るを以て世人牛の日を天神來詣の吉日とす依て牛天神と稱す寄町署す

飾り附

正面朱の鳥居額を掲げ天神山と書せり妙法院宮堯然親王の御筆なり洞の内に座像の天神を安置す但し木像なり前に高麗狗蓮花臺に座す三方擬寶珠付の階あり兩脇に隨神板畫にして狩野益信の筆なり（前掛）金箔置き蝦夷錦（胴幕）緋羅紗眞松に紅梅の作り花鈴數多付ける（胴卷）同切（見送り）長崎繻臥龍の圖劉玄德三顧（古前掛）及び（古胴卷）猩々緋高麗錦雲龍正面に岩に獅子の繻兩脇鳳凰松に梅の繻緣萌黄地金入り幔幕（古見送）綴の錦模樣唐子遊び緣猩々緋鳥盡しの繻四方に萌黄糸の房付き

○太子山

油小路佛光寺下る町より出づる（人形）木像にして運慶の作右の手に柏扇を持ち左の手に斧を持つ衣裳唐衣差貫を着す

縁起

往古六角堂の地に杉の老樹あり聖德太子此老杉一本を以て餘材を交へず六角堂を建立ありし其像を模せし體なり

飾り附

山の眞は杉にして枝に守袋を付す洞の上の厨子に入りたるは如意輪觀音一寸八分の小像也（前掛）猩々緋の繻（胴卷）和蘭陀織り金地花鳥の模樣（見送り）綴れの錦花色地龍の模樣緣は猩々緋（洞幕）緋羅紗（古水引）紺地織物黄石公張良の模樣（古二番水引）猖紅の錦（古三番水引）檜垣の織物（古前掛）朝鮮錦兩脇赤地の織物角龍の唐繻（古洞幕）猩々緋（古胴卷）織物類立次ぎの幔幕（古見送）地織綾金地模樣唐子遊び緣萌黄羅紗

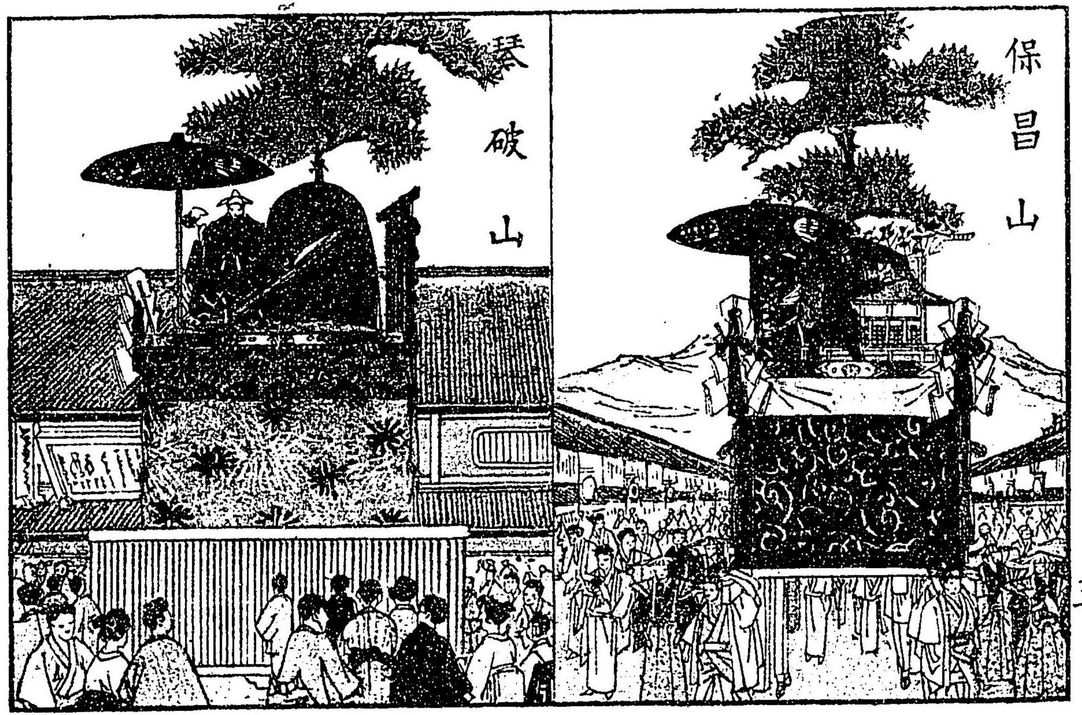
○函谷鉾

四條通り烏丸西入る町より出づる（鉾頭）月に山形（人形）孟嘗君に雌雄の雞人形 柵の上に柵あり柵の模樣石垣

縁起

史記に見えたる齊の孟嘗君が函谷關を越えたる古事を模せしなり鉾頭の月に山形は之れ函谷關夜中の體なりと云へり

飾り附



（前註）天竺物緞の錦れ天竺の人立ち上り酒宴をなし拳なぞを打つ體なり水瓶馬等の類其外樹木山岳甚だ多し（上水引）赤地錦雨に雲龍但し年に依て掛け替へを用ゆ（下水引）紺地錦（二番水引）蜀紅錦（胴卷）三方共毛氈緣猩々緋（見送り）袋表具紺地の紋絹金泥にて明人の筆總緣猩々緋中緣萌黃地金襴（古見送り）紺地の紋絹金泥にて弘法大師の筆にて金剛界禮懺文也兩文共之れを畧す古例を聞かず

○白樂天山

室町綾小路下る所より出づる（人形）鳥巢道林禪師の像高さ四尺餘衣裳は縮緬紅絹を着し帽子花色の羅紗持ち者は紺地金入り座具幷に珠數拂子柱杖金の團扇白樂天の像高さ五尺餘衣裳萌黃花丸錦の狩衣白綸子大口唐冠を被り笏を持つ

緣起

鳥巢道林禪師白樂天問答をなすの體なり

飾り附

（水引）紺地錦涙に龍（前掛）蝦夷錦吳服綸切付（胴卷）猩々緋繡（見送）地織り紋れの錦龍及び鳳凰の模樣（胴幕）緋羅紗（古水引）紺地桐の繡紋（古前掛）金地繡ひ結め緣猩々緋（古胴卷）三方とも猩々緋縷り糸唐繡拳薄の圖形（古見送）和和蘭錦藍地唐草模樣

古例

（前垂）天竺物綴の錦れ天竺の人立ち上り酒宴をなし
笒なぞを打つ體なり水瓶馬等の類其外樹木山岳甚だ多
し（上水引）赤地錦雨に雲龍但し年に依て掛け替へを
用ゆ（下水引）紺地錦（二番水引）獨紅錦（胴卷）三
方共毛氈綠猩々緋（見送り）裘表共紺地の紋紬金泥に
て明人の筆總綠猩々緋中綠萌黃地金襴（古見送り）紺
地の紋紬金泥にて弘法大師の筆にて金剛界禮懺文也兩
文共之れを畧す古例を聞かず

○白樂天山

室町綾小路下る所より出づる（人形）烏巢道林禪師の
像高さ四尺餘衣裳は綿細紅絹を着し帽子花色の羅紗持
ち者は紺地金入り座具幷に珠數拂子柱杖金の團扇白樂
天の像高さ五尺餘衣裳萌黃花丸錦の狩衣白綸子大口唐
冠を被り笏を持つ

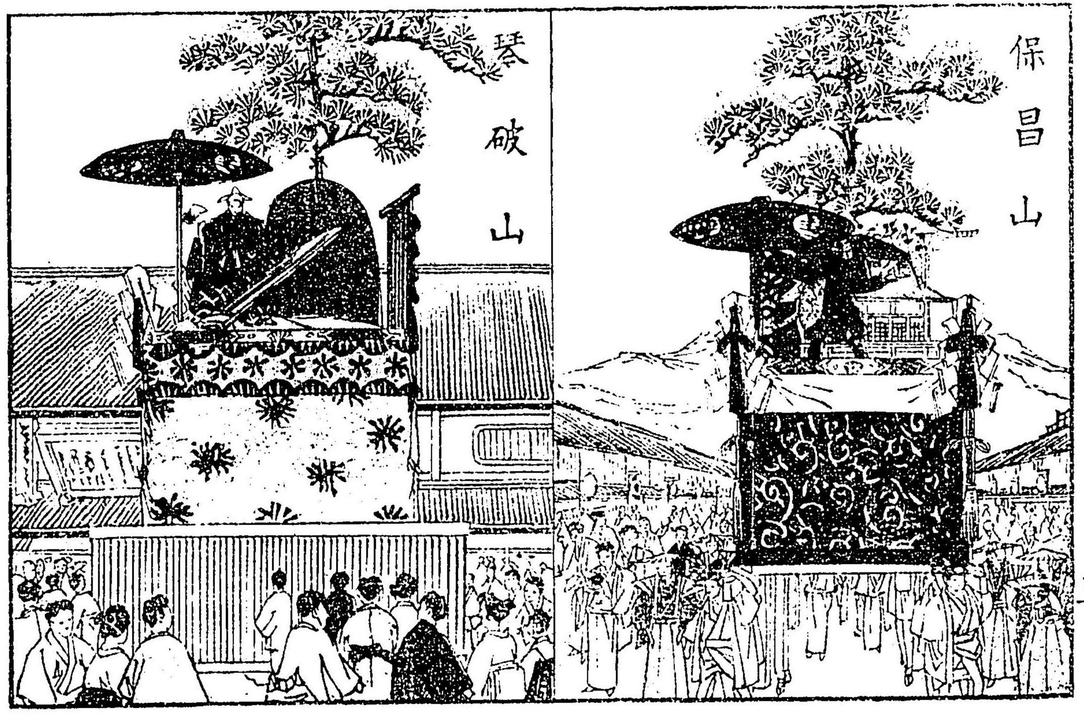
綠起

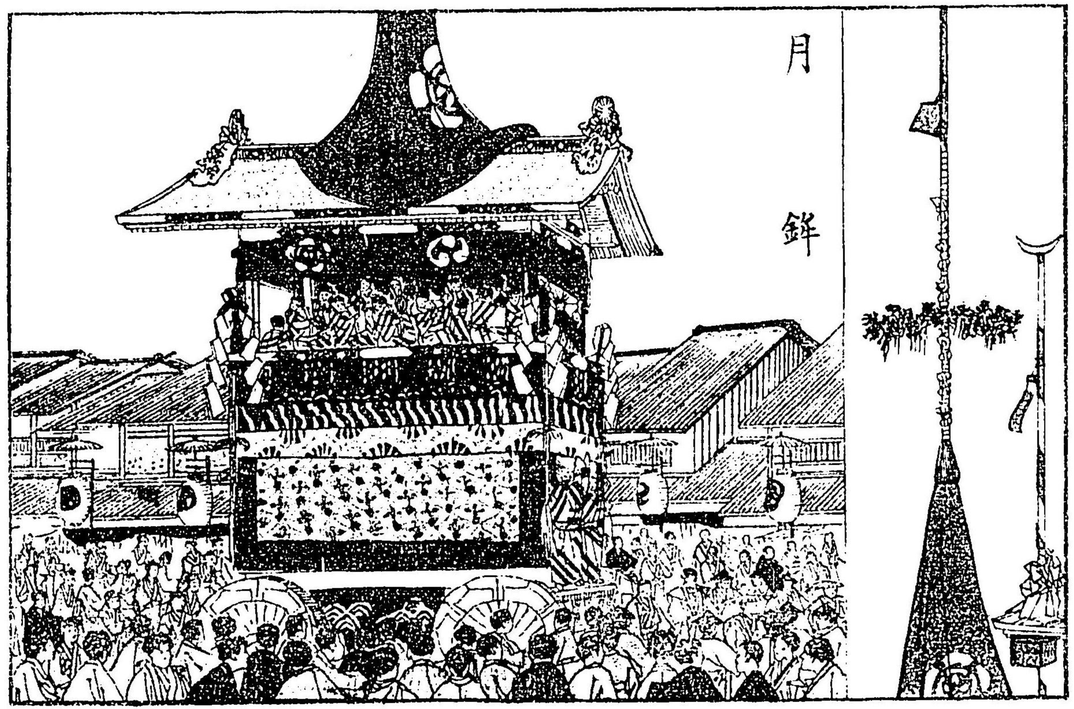
烏巢道林禪師白樂天問答をなすの體なり

飾り附

（水引）紺地錦浪に龍（前掛）蝦夷錦吳服綸切付（胴
卷）猩々緋繡（見送）地織り綴れの錦龍及び鳳凰の模
樣（胴幕）緋羅紗（古水引）紺地桐の繡紋（古前掛）
金地繡ひ結め綠猩々緋（古胴卷）三方とも猩々緋縷り
糸唐繡奉謝の圖形（古見送）和和闐錦藍地唐草模樣

古例





山の眞松は古へより東山より取出だすを例とす吉符入の前に行事番同道にて松の見分に至る且つ神事行事番は古へより西側のみ之れを勤め東側は勤めず是當町の古例なり又此町に午頭天皇の神號あり韓国親王の御筆にして軸物とす又道林白樂天山來書二卷大德寺天室和尚の筆なり寄町は畧す

○破琴山

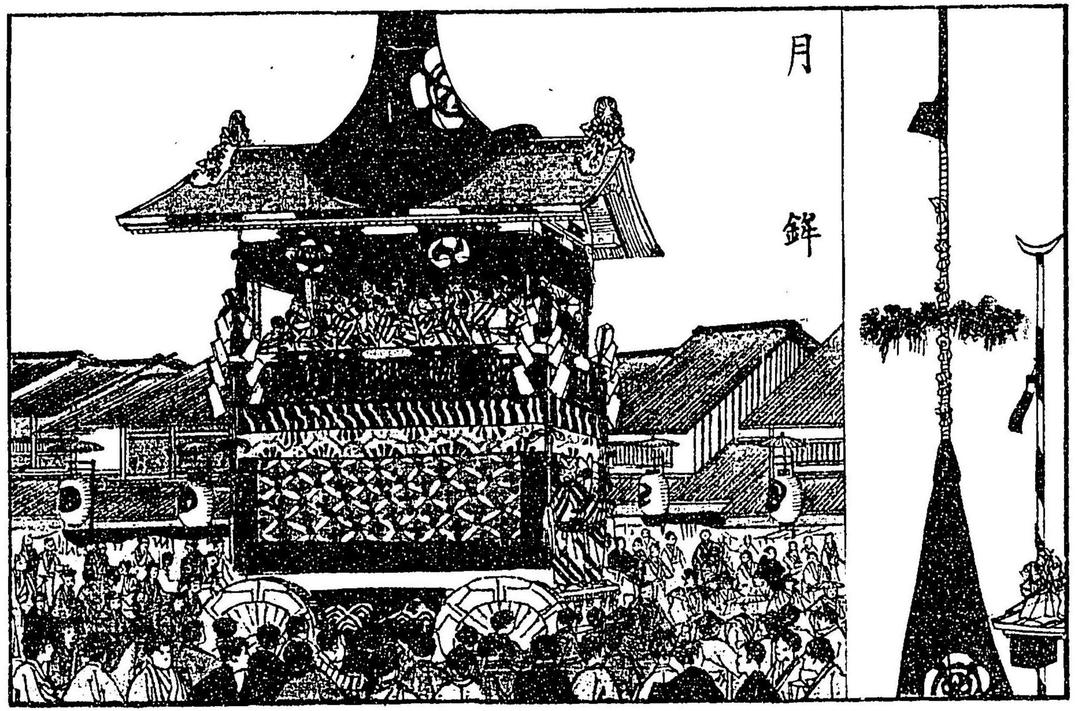
綾小路新町西入る町より出づる（人形）高さ六尺五寸衣裳罪の半臂半切色は丁子茶縷金の模樣あり腰帶天鵞絨にて窠巴の紋を繡ふ花色錦龍の小模樣大口を着す前に十三弦の琴を置き手に笏を持てり

緣起

此山の一名を伯牙山と云へども一説に戴安道と云ふ人平常楽むに琴を以てせり晋の武陵王睎安道が琴を能くする事を知り使者を發して召したるに其使に對し琴を破りて曰く安道は伶人となるを欲せずと萬姪統譜と云ふ書に見えたり此古事を模せしならむ伯牙は琴の絃を絶ちたるのみなり安道は琴を破りたる事なれば此人形戴安道なるべきか伯牙山に稱せしは古へより云誤まてるにや

飾り附

（前掛）地繻ひ婦人唐子の模樣（胴卷）左右共地織綴れの錦花鳥の模樣（見送）地織綴れの錦花色地八仙人



山の眞松は古へより東山より取出だすを例とす吉符入の前に行事番同道にて松の見分に至る且つ神事行事番は古へより西側のみ之れを勤め東側は勤めず是當町の古例なり又此町に午頭天皇の神號あり尊圓親王の御筆にして軸物とす又道林白樂天由來書二卷大德寺天室和尚の筆なり寄町は畧す

○破琴山

綾小路新町西入る町より出づる（人形）高さ六尺五寸衣裳單の半臂半切色は丁子茶縷金の模樣あり腰帶天鵞絨にて窠巴の紋を繡ふ花色錦龍の小模樣大口を着す前に十三弦の琴を置き手に斧を持てり

緣起

此山の一名を伯牙山と云へども一說に戴安道と云ふ人平常樂むに琴を以てせり晉の武陵王脩安道が琴を能くする事を知り使者を發して召したるに其使に對し琴を破りて曰く安道は伶人となるを欲せずと萬姬統譜と云ふ書に見えたり此古事を模せしならむ伯牙は琴の絃を絕ちたるのみなり安道は琴を破りたる事なれば此人形戴安道なるべきか伯牙山に稱せしは古へより云誤まてるにや

飾り附

（前掛）地繻ひ婦人唐子の模樣（胴卷）左右共地織綴れの錦花鳥の模樣（見送）地織綴れの錦花色地八仙人

の模様（古前掛）蝦夷錦茶金の龍二つ縁猩々緋中表具仕立紺地織物模様は唐仙人同文錦と云ふ由上下に慶齋の詩あり（古胴卷）蝦夷錦金の小模様縁猩々緋（古見送）唐織茶純子諸鳥數多縁猩々緋登り龍下り龍下に浪金糸にて繡へり

○郭巨山

俗に釜堀山とも云ふ

四條通西洞院東入る所より出る（人形）郭巨兩の手に鍬を持たせたり但し左の手を頭とす衣裳紺地金入牛臂萌黄雲形金紋紗唐子右の手に團扇左手に牡丹衣裳唐子の仕立萌黄縮紗に牡丹唐草前に金の釜を置く

縁起

廿四孝の内郭巨が金の釜を堀り出したる體を模せり

飾り附

（前掛）紅地綴れ織人物の模様（胴卷）紺紬絹明人賀齋の文を金糸繡にして縁繻珍輪違ひの模様（見送り）牡丹の作り花模様あり又四方押縁の下極彩色雲の彫物あり（古水引）赤地朝鮮錦（古二番水引）輪違ひ模様紺地金入（古前掛）天鵞絨茶地模様鶏頭の類齋老人唐子唐繻ひ（古胴卷）四布朝鮮錦色取交せ天鵞絨唐繻ひ（古見送り）綴れの錦模様山水賢人縁猩々緋之れを清水切れと云ふ

古例

此山は他の町とは一日遲れて建つる之れ當町の古例なり此山に限り窠巴の紋を付けたる雨障子を掛ける

○鶏鉾

室町四條下る町より出る（鉾頭）三角の内に日の丸三ケ所に紺の苧を付ける（人形）住吉の神形にて衣裳は萌黄金紗狩衣白の差貫を着す月を見る體なり右の手を上げ左の手には杖を持てり今は其下の舟に結ひ付け置けり

縁起

鉾頭の三角の内なる日の丸は則ち之れ鶏卵なり神代の初め混沌未分の體にして三角に紺の苧を付けたるは雲の意なり深秘の説と云ふ鶏を神代の卷に常世の長鳴鳥と云へり

飾り附

（上水引）金地に鳳凰窠巴の模様（下水引）猩々緋唐子遊びの繻ひ（二番水引）地繻ひ詰め青海浪珊瑚珠の模様（三番水引）紺地金襴（前巾）天鵞絨毛氈縁猩々緋（胴卷）毛氈三枚づゝ繋ぎ縁猩々緋（見送り）地織綴れの錦龍模様（古上水引）朝鮮錦紺地模様赤き雲の中に縷金の丸龍（古下水引）唐織紅地牡丹唐草（二番水引）萌黄地敷瓦唐團扇等の模様（三番水引）紺地鐵他唐草（古見送）綴れの錦丸輪の内に奇鳥二羽向合せ其外諸獸諸鳥數多縁猩々緋裾に黒房九つ付け（又）文化年間に新調せし見送りは毛氈の極上品にして外國

人物の模様あり函谷鉾の前掛と同じ品なり但し天竺物なり

○山伏山

室町通錦小路上る町より出づる淨藏山とも云ふ（人形）淨藏貴所の像右の手に珠數左の手に斧を持ち腰に洞貝を付け岩に乗れり衣裳赤地錦の水干白紗金の大口を着し兜巾を頂き袈裟を掛け太刀と小さき刀を帶ぶ

緣起

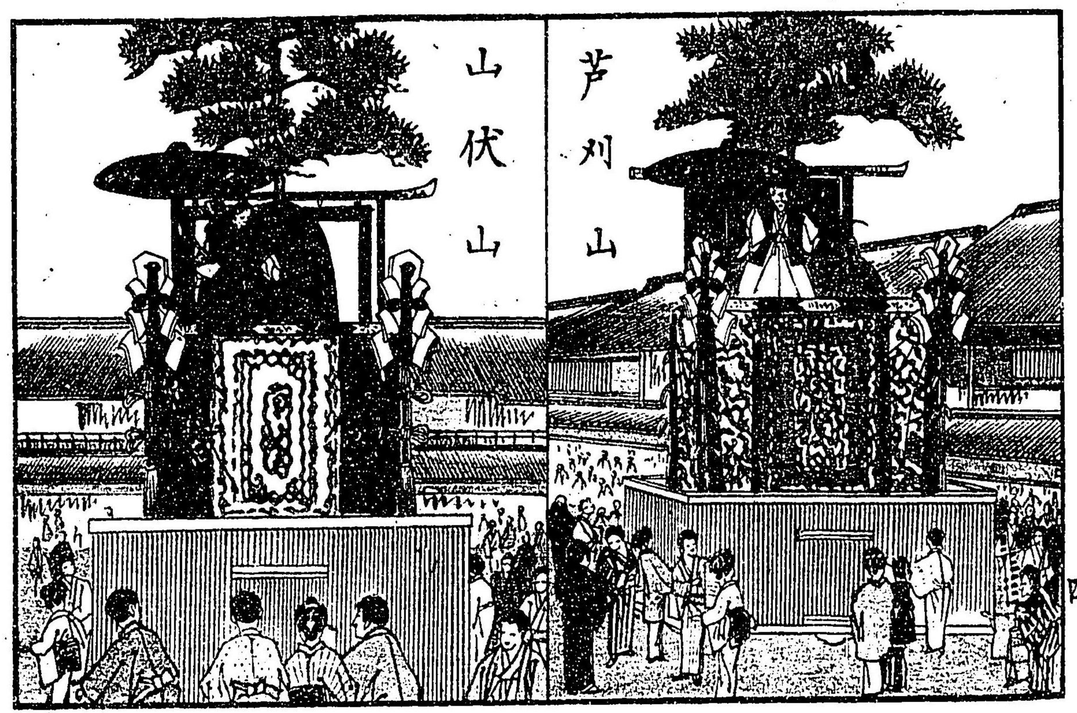
此山は淨藏貴所が八坂の塔傾斜みたるを祈りて直したりと云ふ古事を模すと雖ども又一説には別に子細なし只山伏の峯入りの體を模せし物なりとも云ふ

飾り附

（水引）猩々緋雲龍の模様金糸繡ひ下畫は鶴澤探鯨の筆なり（二番水引）紺地錦桐の模様（前掛）地織金地壽老人の模様彩色入り（胴巻）唐繡ひ孔雀の羽衣ぶせ兩脇紺絖金泥の文字緣猩々緋（見送り）唐錦綴れ織り紅地模様雲龍に青海浪色糸或は蓮花様種々の散し繡ひ緣地笹緣にて甚だ見事なり（古前掛）幔幕赤地古金襴安樂庵紺地色紙切れ雲に鳳凰の模様中の裂れ古渡り金地金襴鳥牡丹（洞幕）萌黃羅紗

古例

四條御幸町の辻にて山を北の方へ向ふ之れ當山の古例なり



人物の模様あり函谷鉾の前掛と同じ品なり但し天竺物なり

○山伏山

室町通錦小路上る町より出づる淨藏山とも云ふ（人形）淨藏貴所の像右の手に珠數左の手に斧を持ち腰に洞貝を付け岩に乗れり衣裳赤地錦の水干白紗金の大口を着し兜巾を頂き袈裟を掛け太刀と小さき刀を帶ぶ

縁起

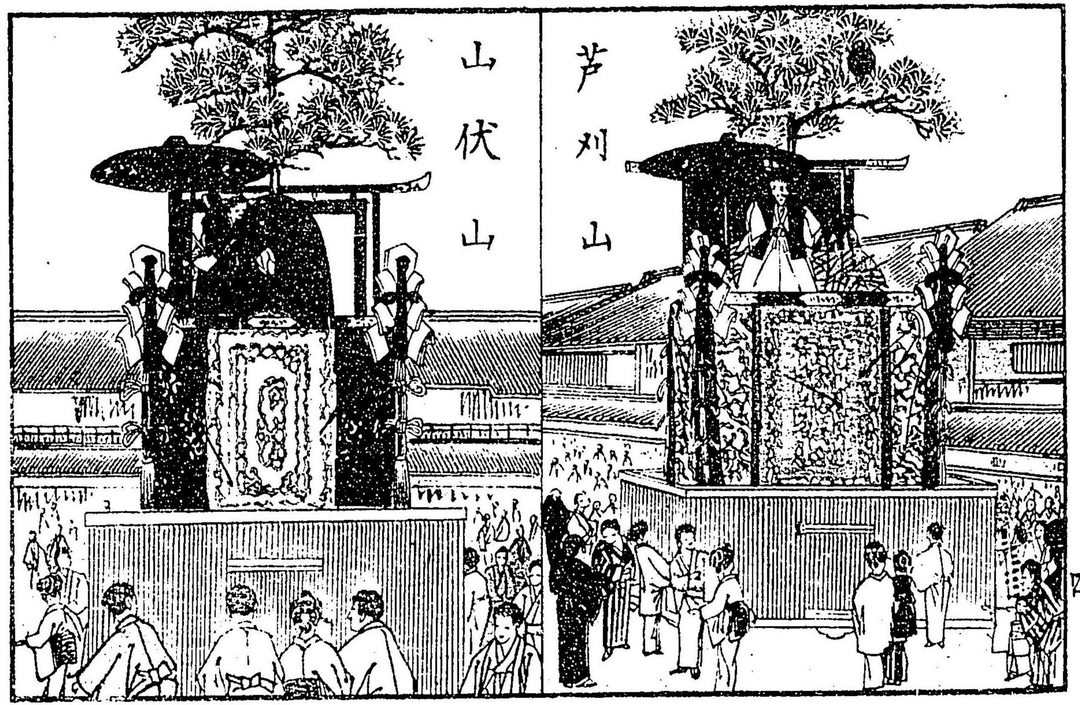
此山は淨藏貴所が八坂の塔傾斜みたるを祈りて直したりと云ふ古事を模すと雖とも又一説には別に子細なし只山伏の峯入りの體を模せし物なりとも云ふ

飾り附

（水引）猩々緋雲龍の模様金糸繡ひ下畫は鶴澤探鯨の筆なり（二番水引）紺地錦桐の模様（前掛）地織金地壽老人の模様彩色入り（胴巻）唐繡ひ孔雀の羽衣ぶせ兩脇紺紬金泥の文字縁猩々緋（見送り）唐錦綴れ織り紅地模様雲龍に青海涙色糸或は蓮花様種々の散し繡ひ縁地笹縁にて甚だ見事なり（古前掛）幔幕赤地古金襴安楽庵紺地色紙切れ雲に鳳凰の模様中の裂れ古渡り金地金襴烏牡丹（洞幕）萌黄羅紗

古例

四條御幸町の辻にて山を北の方へ向ふ之れ當山の古例なり



○霰天神山

俗に錦天神とも云ふ錦小路室町西入る町より出づる

縁起

永正年中火災の際時ならぬ霰降り來り猛火忽ち消し失せぬ人々怪み見るに其長さ一寸二分の天神の像霰と共に降り屋上に止まる依て霰天神と號し又は火除けの天神と名づくとぞ

飾り附

正面朱の鳥居に額を掲げて天神と書す青蓮院の宮御筆（宮殿）屋根檜皮ぶき唐破風向拝作り正面厚黒塗り金物左右金箔横彩色松梅左右金箔置き隨神板畫高欄あり駒犬あり（廻廊）三方瓦屋根彫物四季の花鳥一方三間づゝ下に牛の彫物あり紅梅宮が脇にあり小松十本計り宮の前問り左右にあり（前掛）地織繡ひ詰め人物の模様左右の幕地織り綴れの錦淺黄地草花の模様縁り猩々緋（見送り）和闐陀毛氈蠻國人物の模様縁り全上（古胴卷）正面三布横四布金入り色合ひ取交せ織物模様牡丹龍立涌の類にして幔幕なり

○木賊山

佛光寺通り西洞院西入る町より出づる（人形）居石の手に鎌左の手に木賊を持ち衣裳紺地厚板金入雲龍の模様水衣腰裳腰帶を付く

縁起

○霰天神山

俗に錦天神とも云ふ錦小路室町西入る町より出づる

縁起

永正年中火災の際時ならぬ霰降り來り猛火忽ち消に失せぬ人々怪み見るに其長さ一寸二分の天神の像霰と共に降り屋上に止まる依て霰天神と號し又は火除けの天神と名づくとぞ

飾り附

正面朱の鳥居に額を掲げて天神と書す青蓮院の宮御筆（宮殿）屋根檜皮ぶき唐破風向拜作り正面扉黒塗り金物左右金箔極彩色松梅左右金箔置き隨神板畫高欄あり駒犬あり（廻廊）三方瓦屋根彫物四季の花鳥一方三間づゝ下に牛の彫物あり紅梅宮が脇にあり小松十本計り宮の前同り左右にあり（前掛）地織繻ひ詰め人物の模様左右の幕地織り綴れの錦淺黄地草花の模様縁り猩々緋（見送り）和闐陀毛氈纏國人物の模様縁り仝上（古胴卷）正面三布横四布金入り色合ひ取交せ織物模様牡丹龍立涌の類にして幔幕なり

○木賊山

佛光寺通り西洞院西入る町より出づる（人形）尉右の手に鎌左の手に木賊を持ち衣裳紺地厚板金入雲龍の模様水衣腰蓑腰帶を付く

縁起

信濃國伏屋の里の老人我子商人に誘はれ失ひてその原山に木賊を刈り居るに或時僧其子を連れ來り親子めぐり逢ひし體を模す

飾り附

具板の枝に滿月を掛くる木賊を埒縁の上三方に植る（前掛）金地繡ひ綴れの模様人物左右の縁猩々緋（前水引）地織綴れの鳳凰（左右水引）金地繡ひ詰め模様人物（左右の胴卷）地綴れの錦（見送り）唐織萌黄地綴れの錦模様花鳥縁り猩々緋金糸紗綾形丸龍の繡ひ（古水引）總地繡ひ金糸色糸取交せ賢人樹木水石の模様縁り猩々緋ゆるん形（古胴卷）幔幕にして朝鮮錦正面四布横五布（古見送り）綴れの錦模様牡丹に孔雀鳳凰縁り猩々緋電龍の金糸繡ひ

古例

松原通り御幸町の辻にて山をおろす御幸町松原上る同じく高辻上る兩町より行事番出迎ひに出づる尤も山町の行事番より先立つて案内あり佛光寺油小路西入る木吉町より山の供に出づる山渡り仕舞て後ち油小路通りより當町の西の辻則ち醒が井迄で山を昇き行き其後ち元町に戻る之れ此の山の古例なりと

○月鉾

四條通り新町東入る町より出づる（鉾頭）三日月（人形）月を見る體にて右手にて船を漕ぐ衣裳は下に赤地金織上に萌黄の水干を着す腰に裳あり

縁起

此鉾頂上に新月の形ちあり故に月鉾と稱す之れ則ち月讀の尊を勸請奉たるなりと云ふ一説に和泉小次郎と云へり神代の卷に月讀の尊者可三以治二蒼海原潮之八百重一也云々則ち水徳の神にてまします故海上の縁を取つて舟漕ぐ體の姿を現ハす事其理にかなへり軒の兎又月に依りて縁あり

飾り附

大屋根棟に菊花の金物あり軒に窠巴の紋金物あり裏板金箔とぎ出し涙に兎前後にあり總裏板極彩色草花の模様圓山應擧の筆屋根の破風及び蟇股の彫物は左り芝五郎の作又鉾頭の月形は元龜四年六月三日大銛屋勘左衛門の作（上水引）紺地錦（下水引）猩々緋繡ひ模様花獸の丸（二番水引）紺地金襴模様牡丹の丸（三番水引）地織金地模様唐草（胴卷）前後左右共毛氈縁猩々緋（見送り）唐織り綴れの錦模様百子縁猩々緋（文化年中新調の飾り付）（上水引）猩々緋花丸の繡ひ（下水引）地織綴れの錦人物の模様（二番水引）猩々緋角龍金糸繡ひ（三番水引）地織綴れの錦花色地涙に鯉の模様（古上水引）紺地錦登り龍下り龍（古下水引）朝鮮錦笠敷草無類の者なり（古二番水引）紺地模様窠に菊赤地金入牡丹の模様と二様あり（古三番水引）萌黄地

模様筥に菊此鉾は下水引四番迄て掛る事あり年に依りて掛け替へ數多ある故以下畧す（古前掛）古渡り唐織赤地なり（古胴卷）毛氈縁猩々緋（古見送り）紺地蝦夷錦木爪龍又下に小龍あり縁猩々緋（古例なし）

蘆刈山

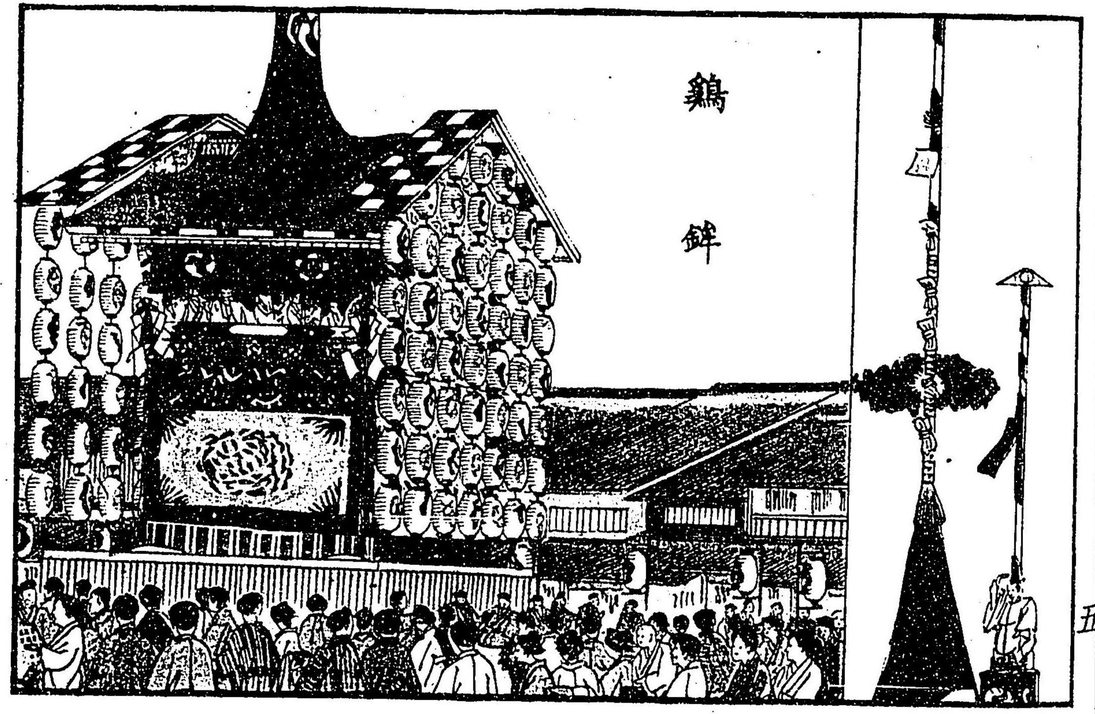
綾小路西洞院西入る町より出づる（人形）尉春日佛師の作高さ凡そ五尺右の手に鎌左の手に芦を持つ衣裳紺地錦上に水衣裾に綿の大口を着す（縁起據所なし）

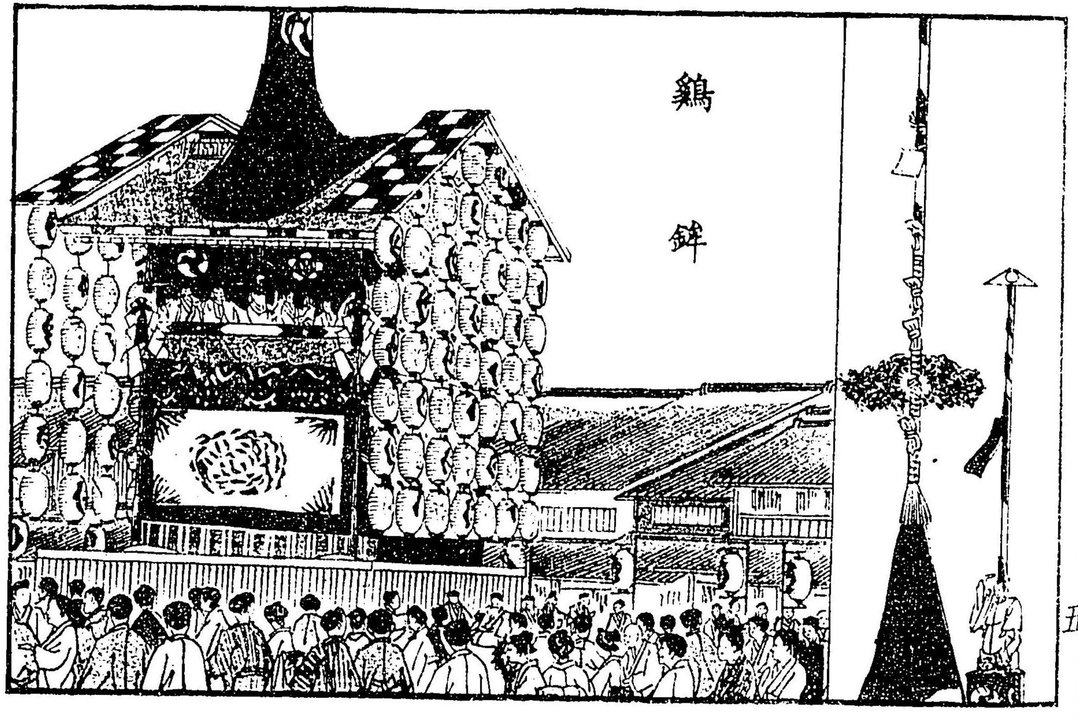
飾り附

眞松に月ある押縁の上に芦を建つる（水引代り）浪千鳥の彫物金箔置き（前掛）地織綴れの錦藍地模様人物（胴卷）幔幕朝鮮錦と唐織と二色立て次ぎ（見送り）唐繡ひ花鳥の模様縁猩々緋（古前掛）紺地蝦夷錦小縁猩々緋（古胴卷）朝鮮錦此三色立て次ぎにて上卷を掛くる（古見送り）唐錦繡ひ模様甚だ細密なり

古例

津の國河邊郡某村より生芦を持ち來りて山に挿む中頃止みて其後ち山城國乙訓部山崎より持ち來るといふ又祭日の朝西洞院の辻へ山を舁ぎ出だす頃綾の小路油小路西入る東井本町の人々油小路の辻より當町會所の前迄で來れば當町の行事挨拶して煙草盆茶神酒洗米を出だし山に供する古例あり之れを俗に芦刈山の御茶煙草盆と云ふ





模様寮に菊此鉾は下水引四番迄て掛る事あり年に依りて掛け替へ數多ある故以下畧す（古前掛）古渡り唐織赤地なり（古胴卷）毛氈綾猩々緋（古見送り）紺地蝦夷錦木瓜龍又下に小龍あり縁猩々緋（古例なし）

蘆刈山

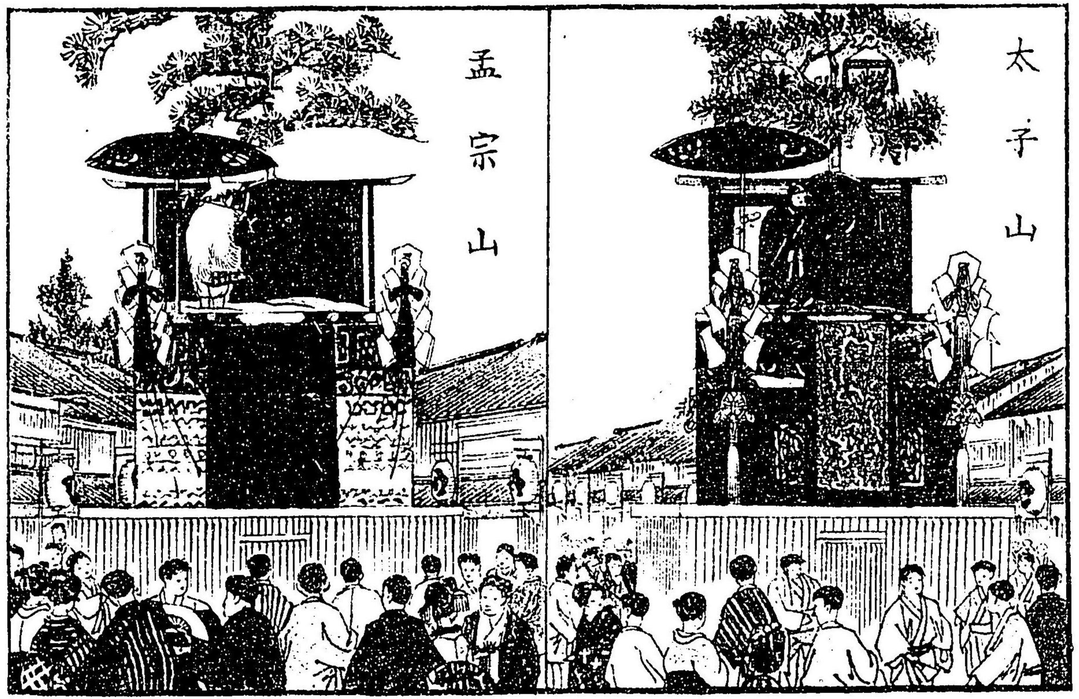
綾小路西洞院西入る町より出づる（人形）尉春日佛師の作高さ凡そ五尺右の手に鎌左の手に芦を持つ衣裳紺地錦上に水衣裾に綿の大口を着す（縁起據所なし）

飾り附

真松に月ある押縁の上に芦を建つる（水引代り）浪千鳥の彫物金箔置き（前掛）地織綴れの錦藍地模様人物（胴卷）輪奈朝鮮錦と唐織と二色立て次ぎ（見送り）唐繡ひ花鳥の模様縁猩々緋（古前掛）紺地蝦夷錦小縁猩々緋（古胴卷）朝鮮錦此三色立て次ぎにて上卷を掛くる（古見送り）唐錦繡ひ模様甚だ細密なり

古例

津の國河邊郡某村より生芦を持ち來りて山に挿む中頃止みて其後ち山城國乙訓郡山崎より持ち來るといふ又祭日の朝西洞院の辻へ山を舁ぎ出だす頃綾の小路油小路西入る東井本町の人々油小路の辻より當町會所の前迄で來れば當町の行事挨拶して煙草盆茶神酒洗米を出だし山に供する古例あり之れを俗に芦刈山の御茶煙草盆と云ふ



○傘鉾

四條西洞院西入る町より出づる俗に之れを四條傘と云ふ

縁起

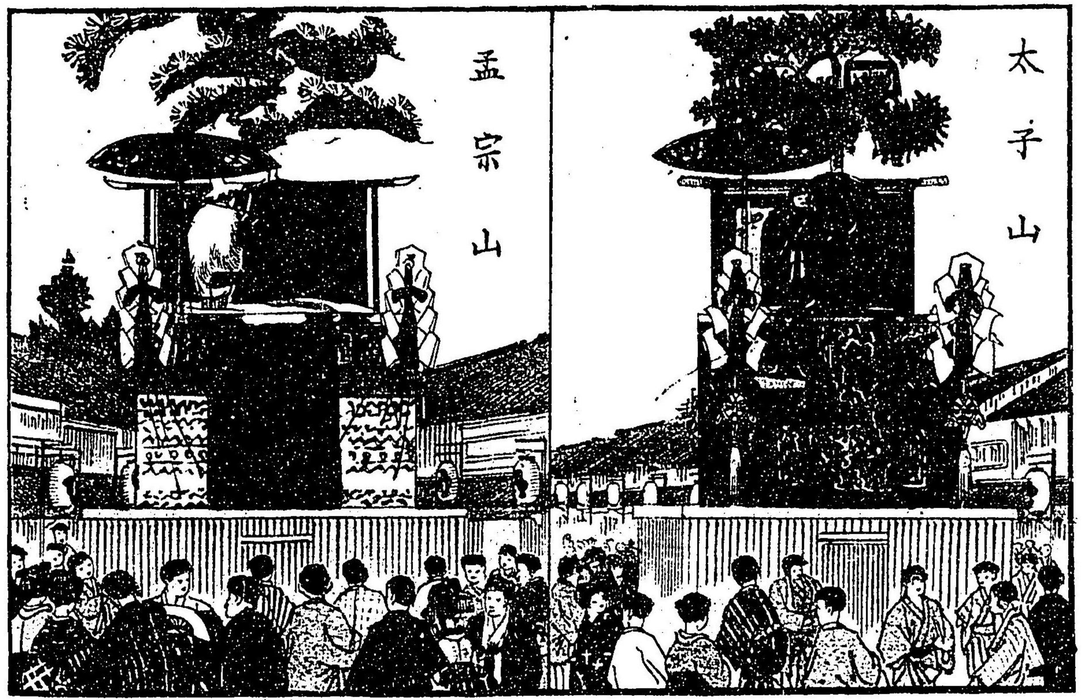
上古の風流今の練り物の類なるか但し傘の事事物記原曰按晋代諸臣皆乗レ車有レ蓋無レ傘元魏自二代一兆一有二中一國一然北俗故便二於騎一耳疑是後魏時始有二其制一也亦古張レ帛爲レ繖之遺事也此語を以て傘の由來を知るべし

飾り附

（傘の上）花瓶に生松赤瓶三つを入る〳〵其下に縷り木綿三つゐり傘に綾地を着せる垂れ衣地織り綾錦唐織り錦猩々緋の繡ひ等のつぎ〳〵なり行列は兒三人床机持子供三人太鼓一人太鼓持ち男二人床机持ち二人傘持ち男二人鉦兒二人從者同上笛男二人棒振り一人此棒振りハ壬生村より來る赤熊がしら裾に純子の跨込み手に棒を持ち朱傘持ち二人警固割竹引二人棒持ち十人

古例

四條高倉寺町四條の辻寺町大雲院の門前佛光寺油小路東入町油小路四條下ル町我町内にて二ヶ處右の處々にて棒振りの曲を爲す寺町四條下ル貞安前之町にて酒迎ひ西洞院五條坊門町にて酒迎ひと團子を出だす油小路四條下ル石筒町にて笹に扇子を付けて出だす之れ此鉾の古例とす



○傘鉾

四條西洞院西入る町より出づる俗に之れを四條傘と云ふ

緣起

上古の風流今の練り物の類なるか但し傘の事事物記原曰按晋代諸臣皆乘車有蓋無傘元魏自代兆有中國然北俗故便於騎耳疑是後魏時始有其制也亦古張帛爲蓋之遺事也此語を以て傘の由來を知るべし

飾り附

（傘の上）花瓶に生松赤瓶三つを入る〳〵其下に纏り木綿三つあり傘に綾地を着せる垂れ衣地織り綾錦唐織り錦猩々緋の繻ひ等のつぎ〳〵なり行列は兒三人床机持子供三人太皷一人太皷持ち男二人床机持ち二人傘持ち男二人鉦兒二人從者同上笛男二人棒振り一人此棒振りい壬生村より來る赤熊がしら裾に純子の踏込み手に棒を持ち朱傘持ち二人警固割竹引二人棒持ち十人

古例

四條高倉寺町四條の辻寺町大雲院の門前佛光寺油小路東入町油小路四條下ル町我町内にて二ケ處右の處々にて棒振りの曲を爲す寺町四條下ル貞安前之町にて酒迎ひ西洞院五條坊門町にて酒迎ひと團子を出だす油小路四條下ル石筒町にて笹に扇子を付けて出だす之れ此鉾の古例とす

○傘　鉾

綾小路室町西入る善長寺町より出づる俗に之れを綾傘と云ふ飾り附行列其凡そ前記に似たれば爰に記するを畧す近時此鉾二本共出てず

○菊　水　鉾

室町四條上る町より出でたれども元治元年の兵火の爲め燒失せし故記するに據る處なし

○放　下　鉾

新町四條上る町より出づる俗に之れを洲濱鉾と云ふ（鉾頭）金の三光星其形ち洲濱に似たる故之れを洲濱と云へり星の下に二つ出づる其形ち角の如き物あり此鉾眞木の長き事餘の鉾に優れり寛文の頃二間計り短かくなりしが今の高さ十二間五尺一寸あり（人形）放下師の戯るゝ躰なり頭に僧帽子を着し腰に鞨鼓を付け手に箒と撥とを持つ

縁　起

差したる子細なし只風流に作りたる物か但し臨濟錄に云ふ看取棚頭弄二偸偸一抽牽都來裏有一人此語に依るか」

飾　り　附

（大屋根）軒の裏總金に四季の草花極彩色（上水引）地織金地の丸龍（下水引）地繡ひ金地人物琴碁書畫の模樣甚た見事なり（二番水引）猩々緋金地繡ひ（胴卷）四方共毛氈一枚物縁り猩々緋（見送り）唐織り綴れの錦唐子遊びの模樣縁り猩々緋萌黄の房を付ける（古上水引）赤地錦模樣葉付きの菊の花尤も細密なり（古下水引）萌黄龜甲（古二番水引）紺地に雲龍下畫は與謝蕪村の筆なり（古前掛）毛氈和闐陀物縁り猩々緋（古胴卷）同樣

古　例

松原通り寺町西入る町にて其町の人々此鉾を出で迎ふと云ふ之れ古へよりの例に依る

○孟　宗　山

烏丸錦小路下る町よりいづる（人形）孟宗の像衣裳唐裝束にて裳笠を付け左の手に鍬右の手に筍を持つ山の全體すべて雪中の景色なり

縁　起

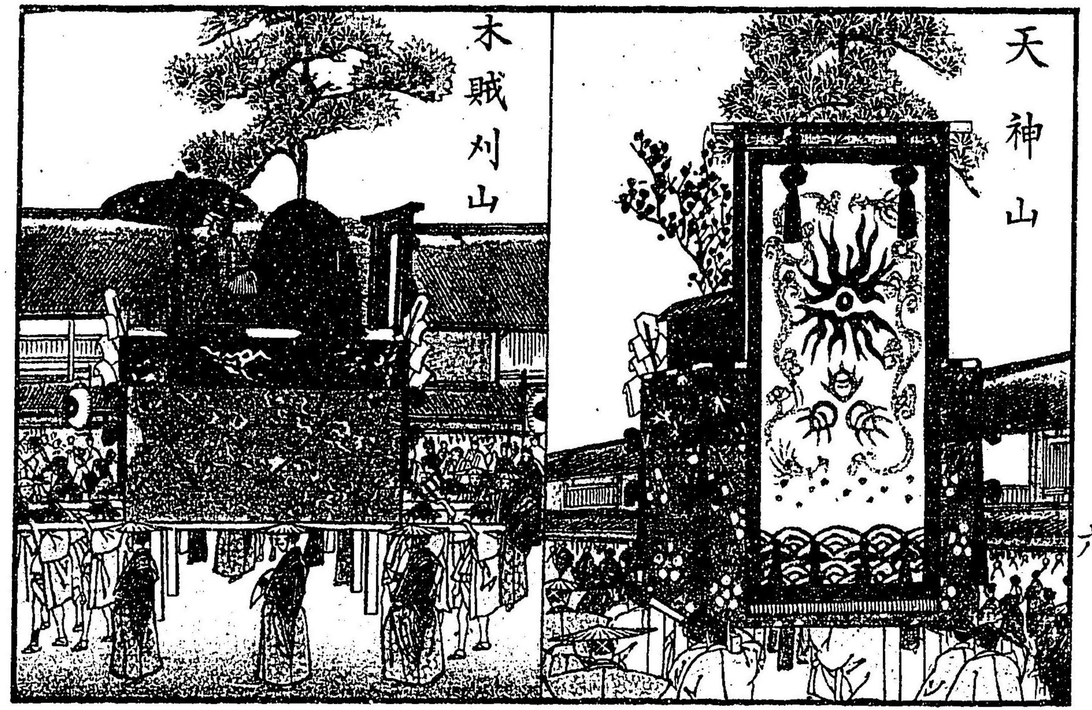
此山は二十四孝の内孟宗が雪中に筍を得たる古事を模す

飾　り　附

（前掛）地織り綴れの錦模樣百子（左右胴卷）仝上模樣人物（見送り）唐繡ひ

宵　夜　飾　り

（前掛）鳶色純子縁り黒羅紗（胴卷）淺黄と茶色の織物幔幕仕立（見送り）黄の紋羅紗縁り黒羅紗（古水引）鳶色朝鮮錦模樣雲龍（古二番水引）古渡り猩々緋唐繡ひ（古前掛）琉球金襴赤地に登り龍縁り黒天鵞絨（古



幔幕）中蜀紅錦 壽の字に五色の雲左右朝鮮錦紺地に雲龍（古見送り）唐草模様地紋繻ひにて呂洞賓縁り古渡りの猩々緋

○保昌山

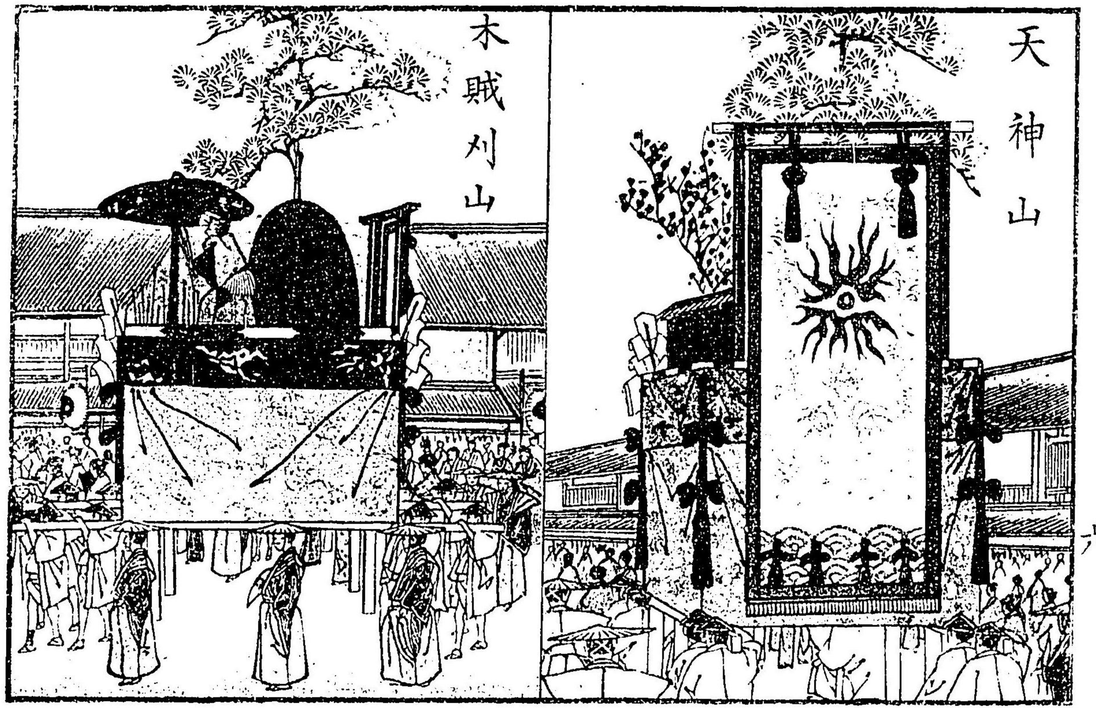
東洞院松原上る町より出づる俗に之れを花偷み山又箙山とも云ふ（人形）高さ六尺餘平井保昌の像なり金梨子地の臺にのせたる紅梅を持ち鎧を着し太刀匕首の三品を帶び腰當てを付くる

緣起

此山は平井保昌官女を戀ひ其請ひに從ひ夜中南殿に忍び入り花を取つて送りしと云ふ古事を模す官女は和泉式部なりと雖も慥ならず平井の保昌和泉式部にあてがれて艶書を送ることしば〳〵なりしがある時中々に筆に盡せぬ言の葉を夢めに通ひて云ふ由もかなと詠じさしつかはしけるとぞ

飾り附

御殿屋根溜塗り狐格子柱黑塗り金物三方に障子あり内に簾を掛け眞松の左りに置く（水引）胸脊房を付ける（胴卷）三方其猩々緋仙人の繻ひ（見送り）地織り綴れの錦模様人物縁り蝦夷錦（古水引）唐錦繻ひ糸に孔雀の羽を多く入れてあり實に珍敷錦なり繻ひ合せ花色地毛天鵞絨飛龍犀猴の類を繻へり（古幔幕）紫地雲龍朝鮮錦 茶地 獨紅錦かすり金唐純子桃色地蝶花唐織り



幔幕）中獨紅錦 詩の字に五色の雲左右朝鮮錦紺地に雲龍（古見送り）唐草模様地紋繡ひにて呂洞賓縁り古渡りの猩々緋

○保昌山

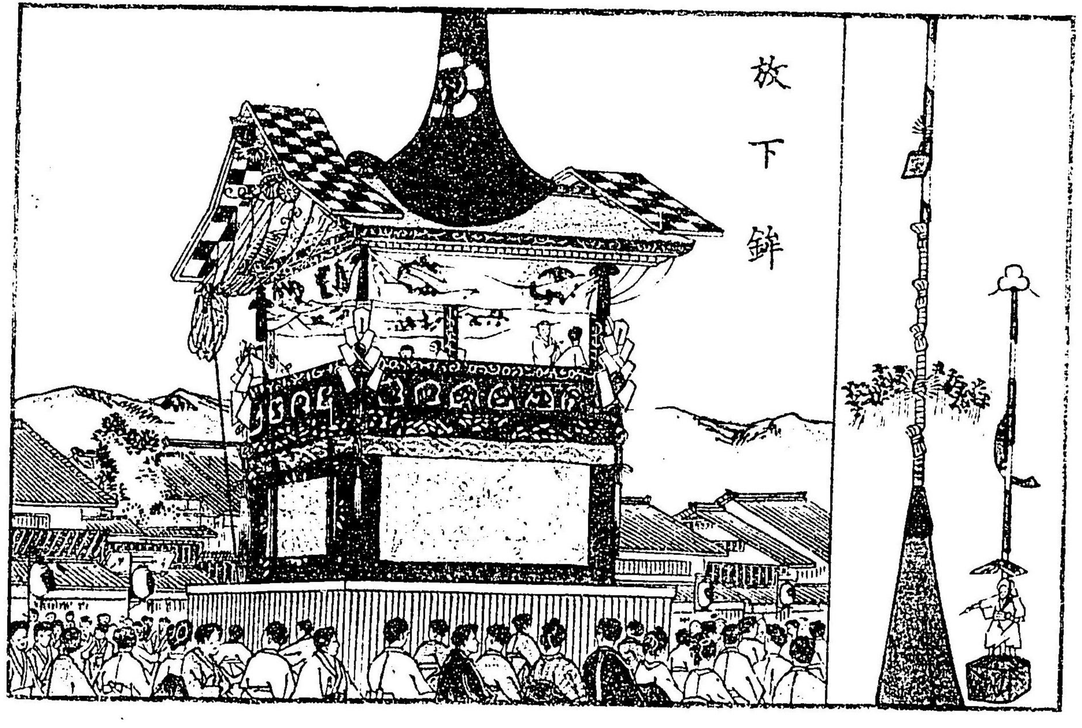
東洞院松原上る町より出づる俗に之れを花偷み山又籠山とも云ふ（人形）高さ六尺餘平井保昌の像なり金梨子地の臺にのせたる紅梅を持ち鎧を着し太刀匕首の三品を帶び腰當てを付くる

縁起

此山は平井保昌官女を戀ひ其請ひに從ひ夜中南殿に忍び入り花を取つて送りしと云ふ古事を模す官女は和泉式部なりと雖も慥ならず平井の保昌和泉式部にあこがれて艶書を送ることしば〳〵なりしがある時中々に筆に盡せぬ言の葉を夢めに通ひて云ふ由もかなと詠じさしつかはしけるとぞ

飾り附

御殿屋根溜塗り狐格子柱黑塗り金物三方に障子あり内に簾を掛け眞松の左りに置く（水引）胸脊房を付ける（胴卷）三方其猩々緋仙人の繡ひ（見送り）地織り綴れの錦模様人物縁り蝦夷錦（古水引）唐錦繡ひ糸に孔雀の羽を多く入れてあり實に珍敷錦なり繡ひ合せ花色地毛天鵞絨飛龍犀獏の類を繡へり（古幔幕）紫地雲龍朝鮮錦 茶地獨紅錦かすり金唐純子桃色地蝶花唐織り



右四色を繡ひ合せり（古見送り）花色地蝦夷錦水に龍
縁り猩々緋

古例

昇初めの際松原東洞院東入る本燈籠町へ昇き行けば其町の會所前へ長柄の鉾二本を立てる兩町互に禮式あり て山を昇き戻す又祭日には寺町松原上る町に休憩す此時薄茶を出だせり之れ古への例とす

○蟷螂山

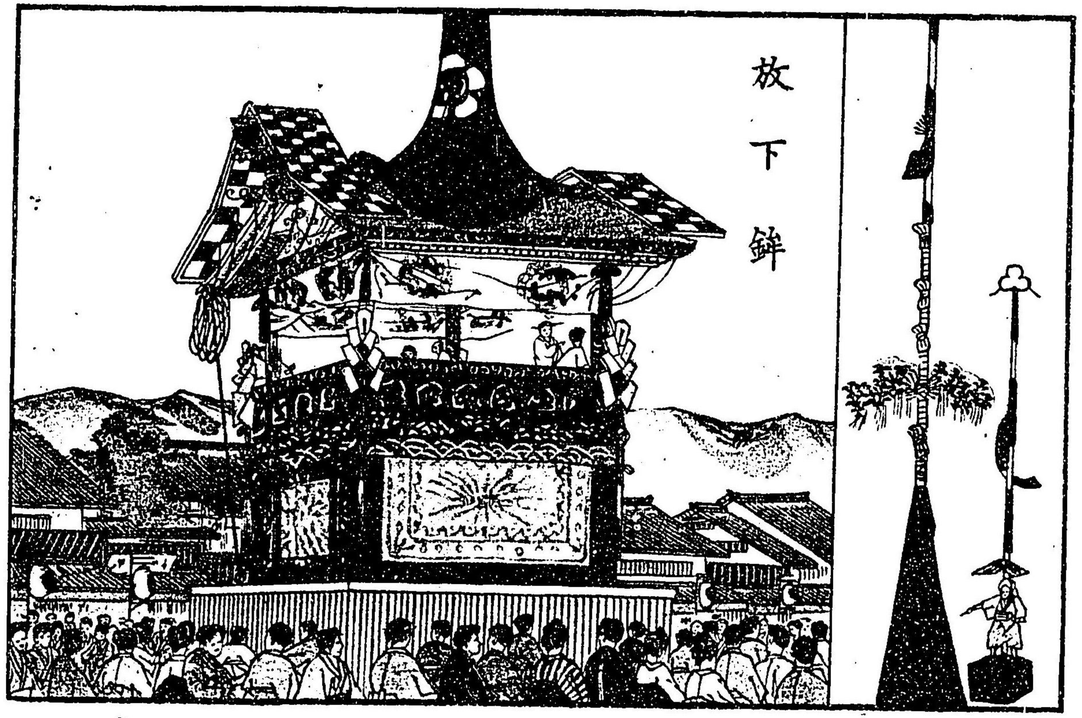
西洞院四條上る町より出でたれども元治元年大火の爲め燒亡して僅かに蟷螂及び御所車のみ殘れりと云ふ委しくは記すに由なし

○岩戸山

新町佛光寺下る町より出づる此町に北組南組あり尤も引山なり（人形）天照皇大神宮白衣にて前に鏡を掛くる戸隱大明神衣冠を頂き明黃水干を着用す伊弉諾尊衣裳唐冠を頂き大口水干太刀刀三振りを佩用し手に釣竿の如き物を持つ此人形一躰は山の屋根の上にあり三神共に新作なりと雖も天明の大火前迄では白絖に繡ひにて癸の紋を付けたる腰帶を着したるが燒失後は今の窠巴の紋を付したる腰帶を着す

縁起

伊弉諾尊の人形山の上にありて釣竿の如き物を持ち給ふは天の浮橋の上より逆か鉾を降し給ふ心なり之れ天



右四色を繡ひ合せり（古見送り）花色地蝦夷錦水に龍
縁り猩々緋

古例

昇初めの際松原東洞院東入る本燈籠町へ昇き行けば其町の會所前へ長柄の鎗二本を立てる兩町互に禮式ありて山を昇き戻す又祭日には寺町松原上る町に休憩す此時薄茶を出だせり之れ古への例とす

○蟷螂山

西洞院四條上る町より出でたれども元治元年大火の爲め燒亡して僅かに蟷螂及び御所車のみ殘れりと云ふ委しくは記すに由なし

○岩戸山

新町佛光寺下る町より出づる此町に北組南組あり尤も引山なり（人形）天照皇大神宮白衣にて前に鏡を掛くる戸隱大明神衣冠を頂き萌黄水干を着用す伊弉諾尊衣裳唐冠を頂き大口水干太刀刀三振りを佩用し手に釣竿の如き物を持つ此人形一躰は山の屋根の上にあり三神共に新作なりと雖も天明の大火前迄では白絖に繡ひにて癸の紋を付けたる腰帶を着したるが燒失後は今の窠巴の紋を付したる腰帶を着す

縁起

伊弉諾尊の人形山の上にありて釣竿の如き物を持ち給ふは天の浮橋の上より逆か鉾を降し給ふ心なり之れ天

神七代を表す洞の内に大神宮まします處は天の岩戸を出で給ふ尊容にして此說甚だ傳あり戸隱明神は手力雄尊にして岩戸を開き給ふ古事を模せり

飾り附

大屋根の上に眞松を植ゑる前に（人形）伊弉諾尊を祭る屋根裏金地草花の極彩色正面に朱の鳥居笠木に鶏一羽あり額に岩戸山と書す内に天照皇大神戸隱大明神の二神を祀る（上水引）猩々緋雲龍の繡ひ（下水引）萌黃羅紗青海浪岩に珊瑚珠の繡ひ（二番水引）猩々緋金糸繡ひ模樣牡丹（三番水引）唐織紺地丸龍（胴卷）三方共毛氈緣り猩々緋（見送り）地織り繡ひの綴れ模樣唐子遊ひ（古上水引）角龍紺地金織り（古下水引）紺地紫扇模樣（二番水引）紺地獅々に牡丹金織り（古前掛）和闐陀毛織模樣分明ならず色赤地（古胴卷）同斷鳥類の模樣（古見送り）紺地金糸繡ひ緣り猩々緋上緣り下緣あり和闐陀織物模樣鳥類（南組古見送り）猩々緋に黑糸の繡ひにて岩戸山と書す南谷の筆なり

古例

引初めの際佛光寺室町西入る糸屋町に引入る其後ち糸屋町より酒飛魚等を送る毎年違ふ事なし尙右の品中へ蒟蒻に酢味噌を引きたるを出だす此時町中は引初めにて甚だ繁多の折柄此式ある故世俗事多き時の假令に引の山の酢の蒟蒻のと云ふ事は此式より初めしと云ふ之れ此山の古例なり

○舟鉾

新町綾小路下る町より出づる南北兩町に分かる俗に行舟とも云ふ（人形）神功皇后天冠金織り紺の大袖緋絨しの鎧大口を着す住吉大明神冠り萌黃錦の大袖鎧大口を着し矢を負ひ弓を持つ鹿島明神立烏帽子紺錦の大袖鎧大口を着す手に唐團扇と長刀を持つ之れ和泉守が作なり安曇の磯良赤熊に龍を立てり半臂半切り大口を着し手に椀理と云ふ木瓜形にて足ある壺に玉をのせて持つ

緣起

神功皇后三韓を退治し給ふ出船の古事を模せり古へは帆柱に朝鮮竹の甚だ見事なる者ありしが長き物故引回はしに勝手悪しき故中興倉庫に納めて近時は之れを用ゐず

奇瑞の事

神功皇后之像腹帶を仕給ふなり安產を願ふ人のため腹帶を幾筋も重ね置き之れを毎年箱にとり納め置き其古きを產婦に貸與ふるに必ず安產をなすと是靈瑞なり

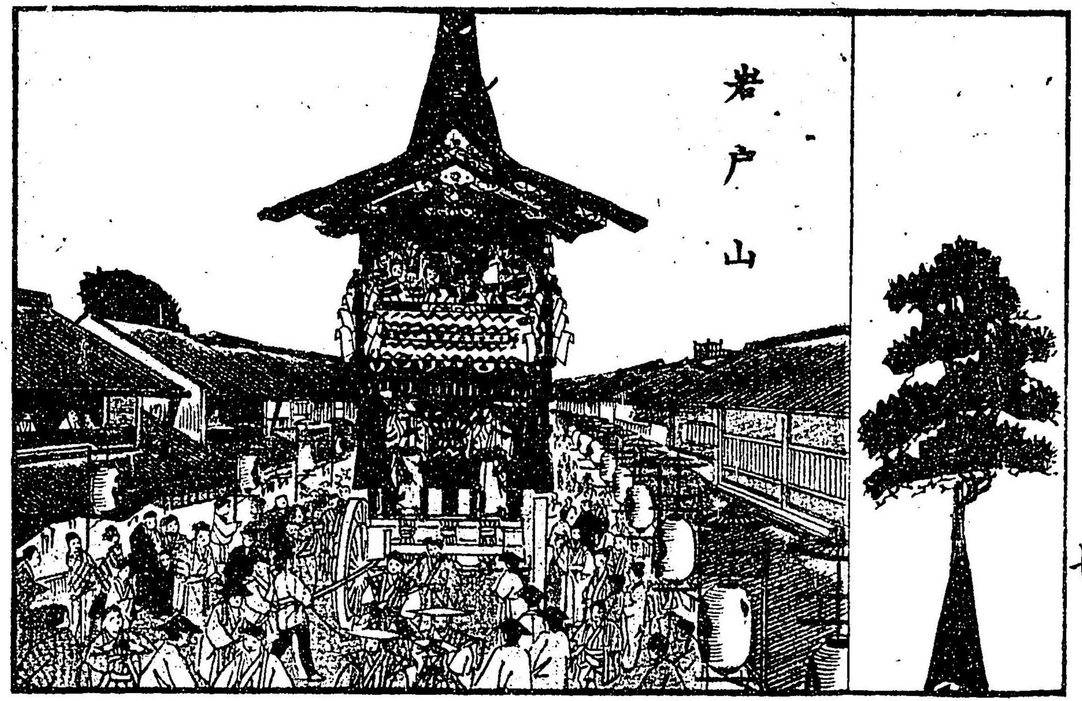
飾り附

（上水引）猩々緋唐草の繡ひ（破風口水引）紫縮緬白上りの紋（高欄下）猩々緋金糸繡ひ窠巴の紋（下水引）金地雲龍の繡ひ（二番水引）紺地錦（胴卷）水引

の如く猩々緋萌黄羅紗二つ繼ぎ（前掛）唐織紅地綴れの錦涙に登り龍の模様縁り猩々緋（舳先）鳳凰金箔置なり（艫屋形上の幕）紫縮緬白上りの紋（下幕）猩々緋麒麟の繡ひ萌黄もじ張りの障子高欄屋形黒塗りの青貝伏せ樺黒塗りにて青貝飛龍の彫物金箔置き（見送り）地織り綴れの錦龍の模様（舵）黒塗り銀にて涙に飛龍を畫く艫屋形高欄朱塗り（下胴巻）木綿紺白上り涙の模様（大屋根）黒塗り棟に鯱あり内は組天井（旗）白絹長さ一丈計り巾一尺計り竿付の處に二つ引き子持ち筋（吹貫）白緋各縮緬上に金箔の玉を付く（旗竿）竹にて藤巻黒塗り（古水引）赤地錦模様七寶に唐草（古下水引）紺地獅子に牡丹唐織り（古二番水引）猩々緋（古三番水引）萌黄羅紗（胴巻）木綿紺地白上りの涙（古舳隠し）黒羅紗登り龍に涙金糸繡ひ（古艦隠し）同斷（古櫓上水引）純子（古櫓下水引）紺地唐織り錦雲の模様（古舵）猩々緋

古例

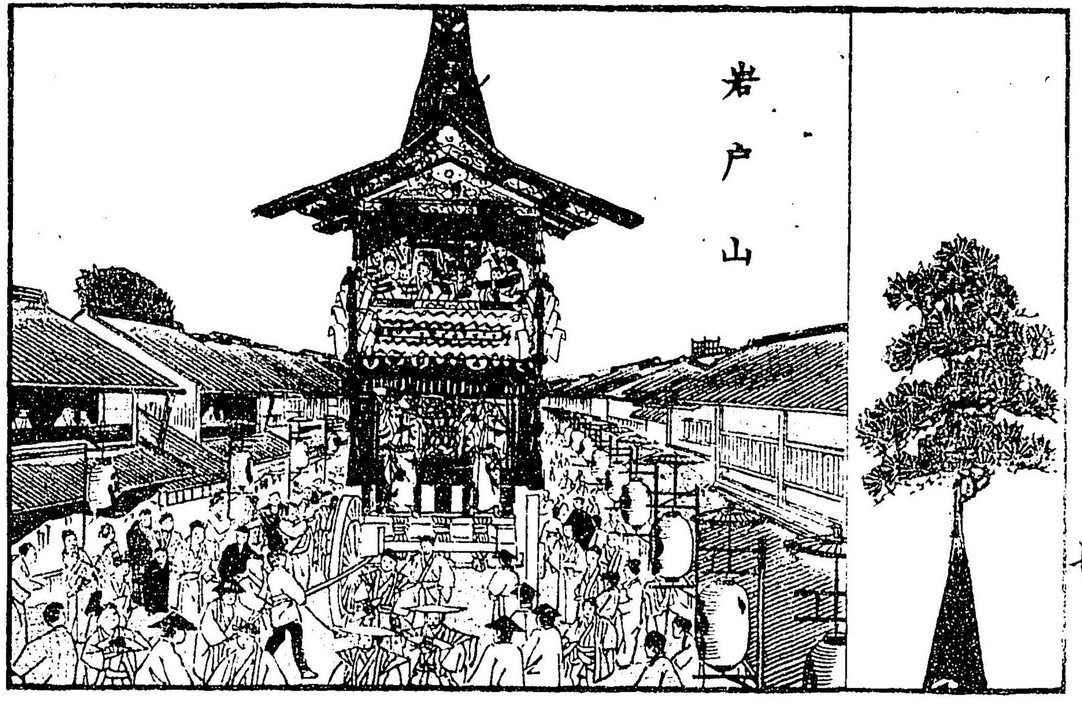
古へは各山鉾町其外氏子の町々より雑色へ地の口を納めしが此舟鉾町に限り雑色の方より地の口を納めたりと云ふ則ち此鉾の古例なり又此鉾町に豐太閤より寄附のだんだら筋の胴巻あり又石田治部の少輔三成寄附と裏書ある幕あり之れをねのころ幕と云ふ黒天鵞絨にねのころの模様ある故斯くは稱へり何れも町内の倉庫に

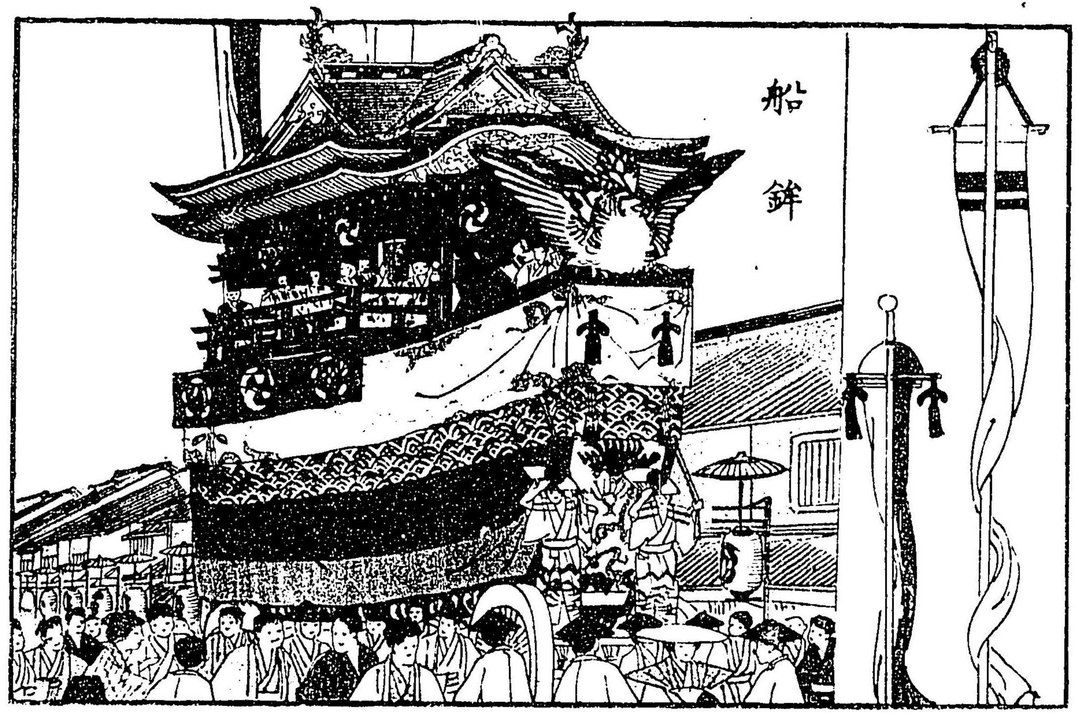


の如く猩々緋萌黄羅紗二つ縫さ（前掛）唐織紅地綴れの錦涙に登り龍の模様縁り猩々緋（舳先）鳳凰金箔置なり（艫屋形上の幕）紫縮緬白上りの紋（下幕）猩々緋麒麟の繍ひ萌黄もじ張りの障子高欄屋形黒塗りの背貝伏せ樺黒塗りにて青貝飛龍の彫物金箔置き（見送り）地織り綴れの錦龍の模様（舵）黒塗り銀にて涙に飛龍を畫く艫屋形高欄朱塗り（下胴巻）木綿紺白上り涙の模様（大屋根）黒塗り縁に鮫あり内は組天井（旗）白絹長さ一丈計り巾一尺計り竿付の處に二つ引き子持ち筋（吹貫）白緋各縮緬上に金箔の玉を付く（旗竿）竹にて藤巻黒塗り（古水引）赤地錦模様七寶に唐草（古下水引）紺地獅子に牡丹唐織り（古二番水引）猩々緋（古三番水引）萌黄羅紗（胴巻）木綿紺地白上りの涙（古舳隠し）黒羅紗登り龍に涙金糸繍ひ（古艫隠し）同斷（古樽上水引）純子（古樽下水引）紺地唐織り錦雲の模様（古舵）猩々緋

古例

古へは各山鉾町其外氏子の町々より雑色へ地の口を納めしが此舟鉾町に限り雑色の方より地の口を納めたりと云ふ則ち此鉾の古例なり又此鉾町に豊太閤より寄附のだんだら筋の胴巻あり又石田治部の少輔三成寄附と裏書ある幕あり之れをねのころ幕と云ふ黒天鵞絨にねのころの模様ある故斯くは稱へり何れも町内の倉庫に



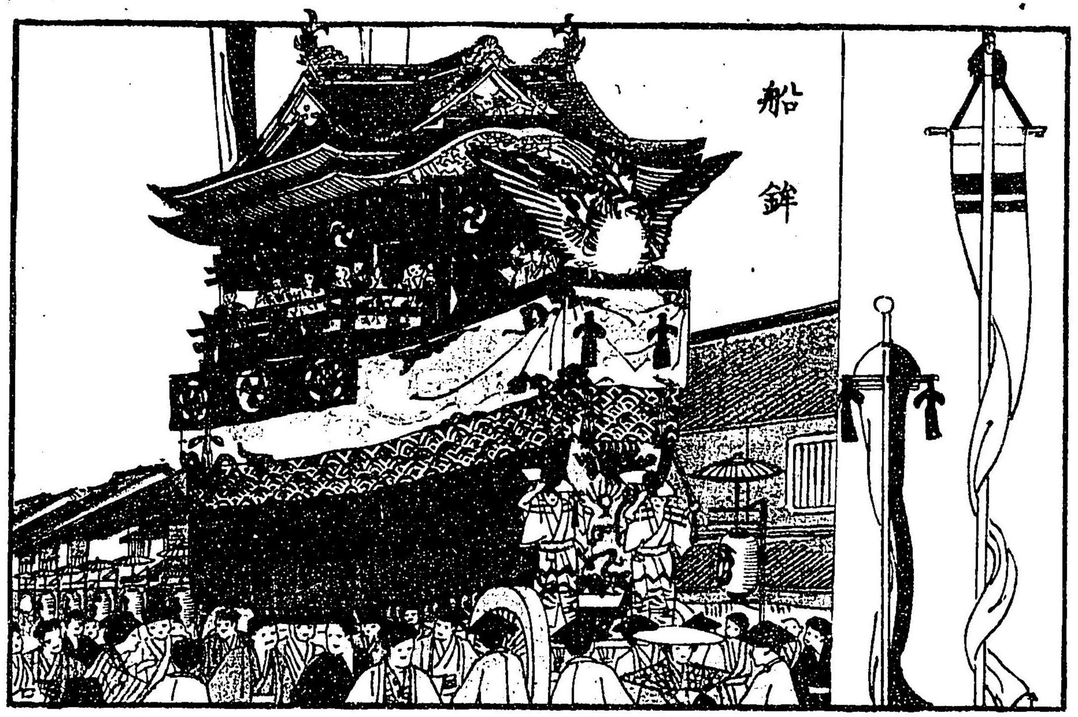


藏めて大切に保管する由此外山鉾に就いて古例古式數多あれども繁ければ之れを畧す

○神幸の次第

同日午の刻(當時の十二時)雜色衆四條道場より祇園社へ初使後使を遣はす事ありて甚だ嚴重なり近時は府廳より奉幣使の參拜あり神官神前に於て神遷の式を行ふ此前に當り弦召凡そ三十名餘甲冑を帶し太かなる飾帶を着し種々の色絹を纏ふて列をなす中に大將一人弓矢を携へ母衣を帶ぶ實に勇々敷き出立なり而して各長柄の朱傘をかざさしむ其隨從者は則ち麻上下に一文字笠を頂けり神遷式終りて舁人と連呼する事三聲神輿三基を舁ぎ來り四條通りを西へ繩手通り北へ三條通り西へ河原町南へ四條を西へ御旅處へ神幸あり供奉は榊干鉾を始め釼鉾弓矢神太刀楯板樂太鼓唐團扇神蓋鳳凰其他種々ありて市中の各氏子則ち淸々講社其組々の旗を建て麻上下一文字笠を頂き供奉をする等實に本邦有名なる祭禮なり一々記するに暇あらず

古へは神輿を三基其本社に還宮の事終つて四條大路を一直線に四條河原假り橋を渡り給ふ此の假り橋は京都材木屋中より架くるを例とす又高瀨橋には新席を敷く之れ何れも古例なりそれより惡王子神社(京極御旅處の少し東にあり)の前にてなげ御供の式あり(則ち其式は洗米切麻榊葉を入れ神供舟にのせ之れを頭に頂き



藏めて大切に保管する由此外山鉾に就いて古例古式數多あれども繁ければ之れを畧す

○神幸の次第

同日午の刻(當時の十二時)雜色衆四條道場より祇園社へ初使後使を遣はす事ありて甚だ嚴重なり近時は府廳より奉幣使の參拜あり神官神前に於て神遷の式を行ふ此前に當り弦召凡そ三十名餘甲冑を帶し太かなる飾帶を着し種々の色絹を纏ふて列をなす中に大將一人弓矢を携へ母衣を帶ぶ實に勇々敢き出立なり而して各長柄の朱傘をかざさしむ其隨從者は則ち麁上下に一文字笠を頂けり神遷式終りて舁人と速呼する事三聲神輿三基を舁き來り四條通りを西へ繩手通り北へ三條通り西へ河原町南へ四條を西へ御旅處へ神幸あり供奉は榊玉鉾を始め釼鉾弓矢神太刀楯板樂太皷唐圓扇神蓋鳳凰其他種々ありて市中の各氏子則ち淸々講社其組々の旗を建て麁上下一文字笠を頂き供奉をする等實に本邦有名なる祭禮なり一々記するに暇あらず

古へは神輿を三基其本社に遷宮の事終つて四條大路を一直線に四條河原假り橋を渡り給ふ此の假り橋は京都材木屋中より架くるを例とす又高瀨橋には新席を敷くこれ何れも古例なりそれより惡王子神社(京極御旅處の少し東にあり)の前にてなげ御供の式あり(則ち其式は洗米切麁刺葉を入れ神供舟にのせこれを頭に頂き

白衣を着けたる女朱の長柄傘をかざさしめ其後より風折烏帽子に白き絹の淨衣を着し乘物に乘りて來る人あり之れ神主代として烏丸萬壽寺下る惡王子町の行事番なり此人洗米を獻するに神輿一基に三つかみづゝをなげ打つ）事終て神輿を御旅所に舁き來る天王八王子の神靈を北の假宮に遷し空輿を北の神輿舍に入る又少將井則ち稻田姫の神靈を南の假宮に遷し空輿を南の神輿舍に入れ置く然して兩假宮共に當日の御供を獻ず遷宮の間神樂を奏す其粧は誠に往古の遺風を存して優美に且古雅なり近時は前記の通筋に變更し御旅所にて神官遷宮の式を執り行ふと雖ども古例は未ざ異るとこなし此日より十四日までを御旅中と稱して街の賑ひ人馬絡繹織るが如くにして都の繁昌筆紙に盡し難し

○御靈會山渡の事

俗に十四日祭と云ふ則ち古の六月十四日（近時は七月二十四日の未明より各山町に於て三條通に例を整へ東へ向ひて巡行を初め寺町通を南へ四條通を西へ東洞院に到りて各其町々へ分列す其列の次第は七日の山鉾に異ることなしと雖も只山のみにして鉾なく其中觀音山のみ之なし曳山と稱して鉾と同じく曳き行く此日より十四日までを御旅中と稱して街の賑ひ人馬絡繹織るが如くにして都の繁昌筆紙に盡し難し

○橋辨慶山

蛸藥師烏丸西へ入る町より出づる（人形）牛若辨慶は二體共永祿六年七條大佛師康運が作なり牛若の衣裳唐織錦の振袖萌黃地長絹半切り太刀を佩く右の手に拔刀を持ち黑塗の高下駄を穿き橋の欄干擬寶珠の上に片足にて立ち止る太刀は盛光の作なりしが現時用ゆる物は近江守が作なり此人形のわした金は天文六年美濃國右近の作なり實に稀代の名作にして重さ人形を一本にて保たしむ然るに此足た金人形を作りし年號よりは二十六年以前の作なるが之れを以て考ふれば其以前の人形は別作なれども惜かな詳かにするを得ず町内にては殊更に祕藏すると云ふ辨慶の衣裳古は黑皮絨を用ゐしが當時は紺糸絨の大鎧錦の直衣鉢卷をなし草鞋をうがち太刀を佩き長刀を持ちて橋の中央に直立す長刀は元美濃國關の住人兼明の作にして長さ二尺三寸なりしが近時用うる物は近江守が作なり

緣起

古安元二年六月十三日の夜辨慶五條天神にて義經に初めて見參す口論の末打物の勝負に及ぶ辨慶かなはず同十七日の夜五條橋にて再び打物の勝負をなす體を寫す

飾り附

（橋）高欄擬寶珠六個にて板ならびに欄干は黑塗り（前掛）藍地唐織綴れの錦正面に龍の模樣左右は地織り金地綴れの錦花の丸模樣（胴卷）左右共地織り綴れの錦葵祭の模樣（見送）地織綴れの錦此外宵夜飾り古

飾り種々あれども繁ければ之を畧す

古例

此山は長刀鉾の如く鬮取らずにて先に進むを例とす

室町六角下る町より出づる

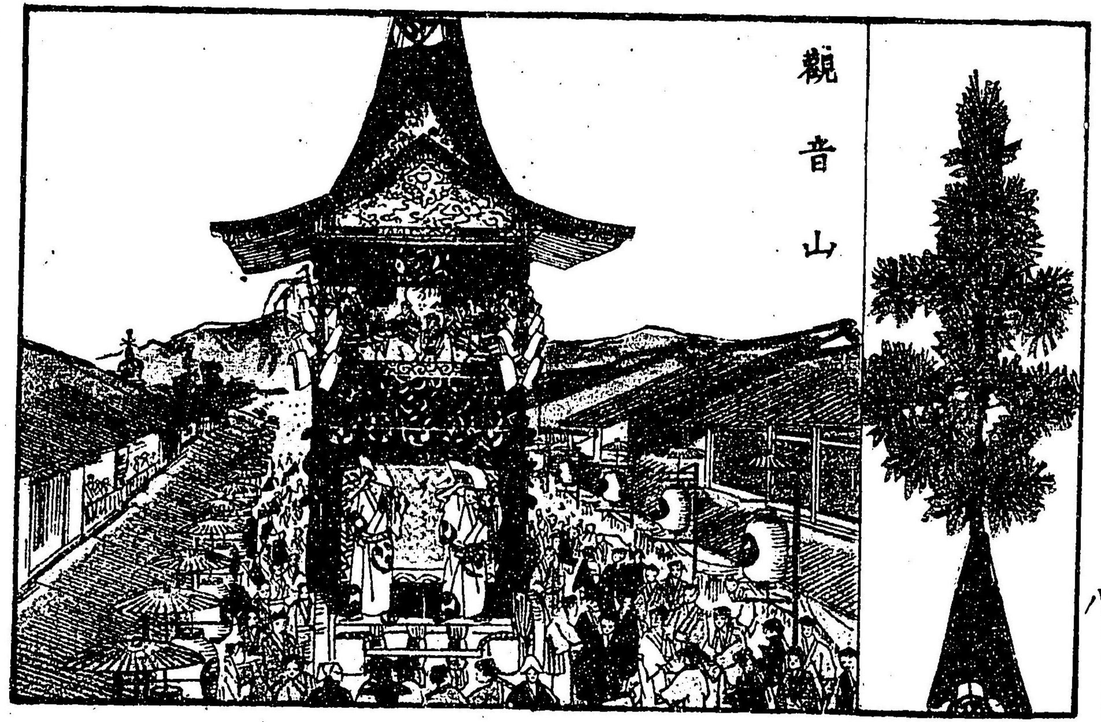
○鯉山

縁起

唐土龍門の瀧を模せし物なりと云へども日本風の宮殿あれば大和國宇陀郡と吉野郡との堺にある龍門の瀧を模せし物ならん

飾り附

（鳥居并びに宮殿）洞の中石垣の上にあり向拜作り左右に隨身の板畫あり高欄付一双の駒犬あり古へは總朱塗りなりしが近年白木にて新調したり祭神は牛頭天王と云ふ則ち素盞嗚尊を勸請す（鯉魚）左甚五郎の作山の左りより下へ渡り宮の前迄殘らず荒浪出づる體なり（正面の彫物）鳥居より左右にあり卷水に鯉の透し彫り（左右の水引）和蘭陀織り毛毬透し人物及び花鳥の模樣函谷鉾の前掛と同種類なり（前掛）同品（見送り）同品にして人物及び禽獸樹木遠山の模樣（胴卷）地織り綴れの錦人物の模樣縁り紅地呉呂服連龍の唐繍ひ切り付つ（古水引）花色地錦牡丹の模樣（古胴卷）四方共幔幕紺地萠黄地朝鮮錦其外赤地花色白紺などの織り物の立て次ぎ（古見送り）和蘭陀織り遲々緋鳳凰



飾り種々あれども繁ければ之を畧す

吉例

此山は長刀鉾の如く隨取らずにて先に進むを例とす

○鯉山

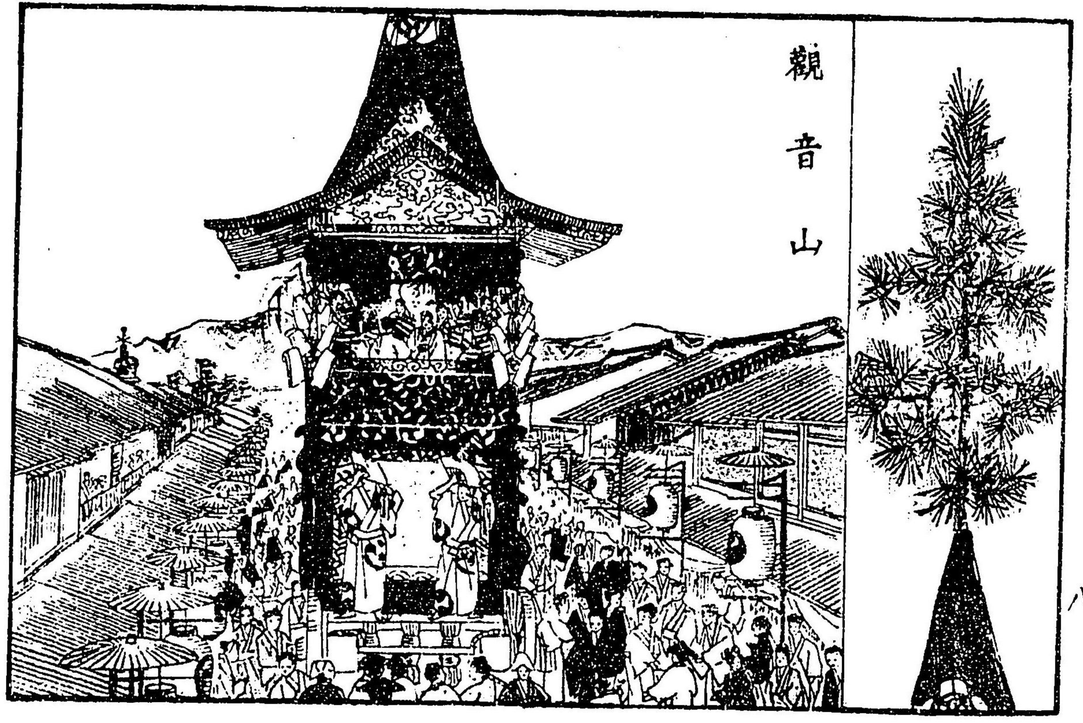
室町六角下る町より出づる

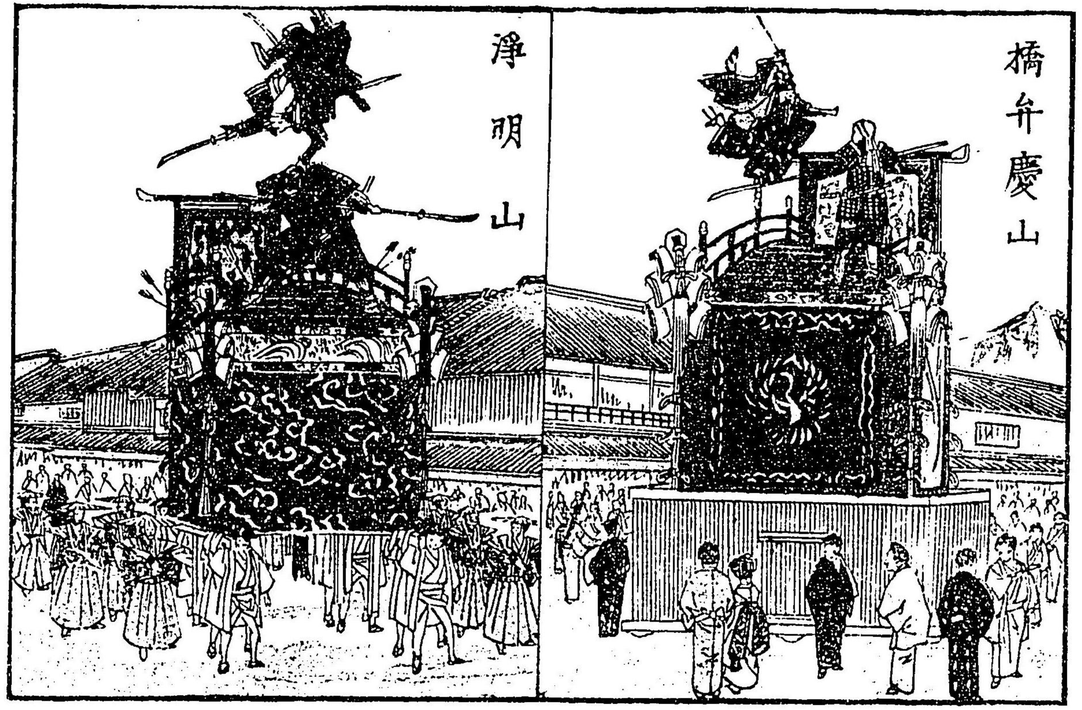
緣起

唐土龍門の瀧を模せし物なりと云へども日本風の宮殿あれば大和國宇陀郡と吉野郡との堺にある龍門の瀧を模せし物ならん

飾り附

（鳥居幷びに宮殿）洞の中石垣の上にあり向拜作り左右に隨身の板畫あり高欄付一双の駒犬あり古へは總朱塗りなりしが近年白木にて新調したり祭神は牛頭天王と云ふ則ち素盞嗚尊を勸請す（鯉魚）左甚五郎の作山の左りより下へ渡り宮の前迄殘らず荒浪出づる體なり（正面の彫物）鳥居より左右にあり卷水に鯉の透し彫り（左右の水引）和蘭陀織り毛氈透し人物及び花鳥の模樣囲谷鉾の前掛と同種類なり（前掛）同品（見送り）同品にして人物及び禽獸樹木遠山の模樣（胴卷）地織り綴れの錦人物の模樣緣り紅地呉呂服連龍の唐繻ひ切り付つ（古水引）花色地錦牡丹の模樣（古胴卷）四方其幔幕紺地朮黄地朝鮮錦其外赤地花色白紺などの織り物の立て次ぎ（古見送り）和蘭陀織り猩々緋鳳凰





の繡ひ

鯉山の由來

昔し此町に裏屋住居の夫婦あり大津の魚商人より大鯉一尾を求め之れを調理しければ腹中に黄金十斤あり之れ其家主が以前湖邊にて取りおとしたる物ならんとて之れを返さんと云ふに家主は一旦落したる物は我物にあらずとて受けず互ひに爭論となり終に官に訴ふ官其正邪を賞し之れを后世に傳へんが爲め十斤の金を以て其頃同町に住居して名譽を全國に揮かしたる左り甚五郎に鯉を彫らせ祇園祭禮の山の内に加へ卽ち鯉山と名づくべしと申渡されたりと云ふ事蹟近世畸人傳に見えたれども記者其是非を保證せず

〇八幡山

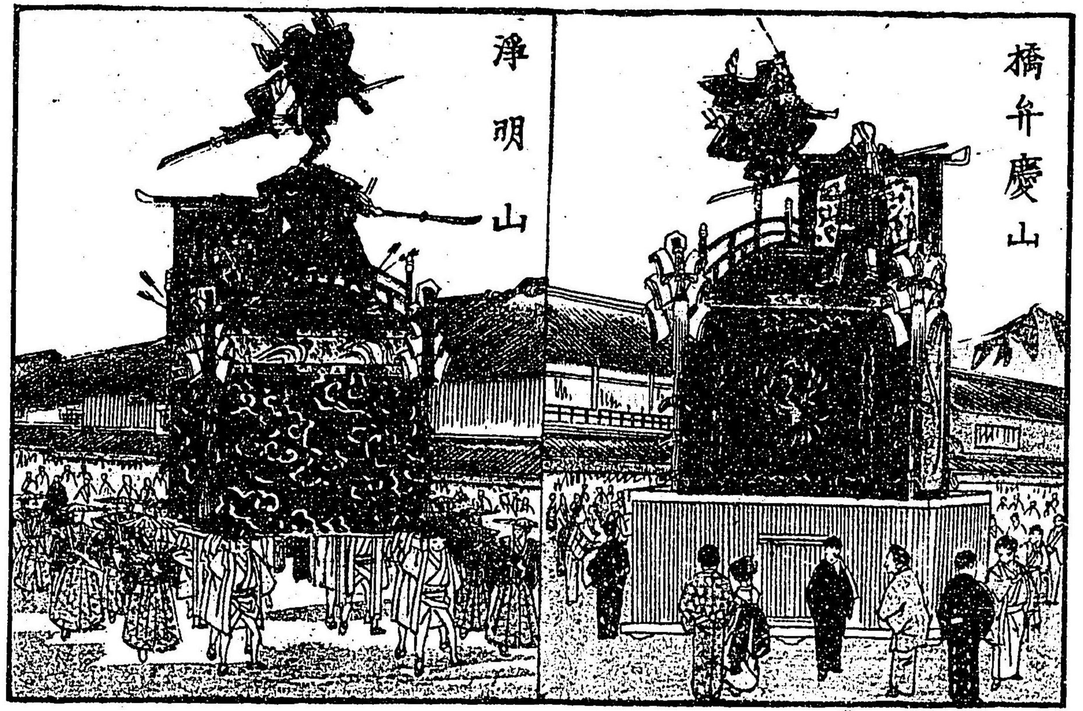
新町三條下る町より出づる

絲起

八幡宮を勸請す之れ則ち應神天皇の御祀なり（古例なし）

飾り附

（朱の鳥居）笠木に鳩二羽向ひ合せ額を掲ぐ（宮殿）屋根其總金にして一双の狗犬と二本の小松前にあり（前掛）三枚續き中は唐織り慶讃裂れと云ふ左右は日本織り又は針金織りとも云へり緣り猩々緋（水引）金地唐艸繡ひ詰め（胴卷）紅地織り綴れの錦龍の模樣（見



の繡ひ

鯉山の由來

昔し此町に寡屋住居の婦あり大津の魚商人より大鯉一尾を求め之れを調理しければ腹中に黄金十斤あり之れ其家主が以前湖邊にて取りおとしたる物ならんとて之れを返さんと云ふに家主は一旦落したる物は我物にあらずとて受けず互ひに爭論となり終に官に訴ふ官其正廉を賞し之れを后世に傳へんが爲め十斤の金を以て其頃同町に住居して名譽を全國に輝かしたる左り甚五郎に鯉を彫らせ祇園祭禮の山の内に加へ即ち鯉山と名づくべしと申渡されたりと云ふ事蹟近世畸人傳に見えたれども記者其是非を保證せず

〇八幡山

新町三條下る町より出づる

緣起

八幡宮を勸請す之れ則ち應神天皇の御社なり（古例なし）

飾り附

（朱の鳥居）笠木に鳩二羽向ひ合せ額を掲ぐ（宮殿）屋根共總金にして一双の駒犬と二本の小松前にあり（前掛）三枚續き中は唐織り慶壽裂れと云ふ左右は日本織り又は針金織りとも云へり緣り猩々緋（水引）金地唐卿繡ひ詰め（胴卷）紅地織り綴れの錦龍の模樣（見

送り）紅地唐織り綴れの錦婦人唐子琴碁書畫の模様縁り猩々緋（古水引）茶色地織り色分け雲龍紗金（古胴巻）三方共花色羅紗唐獅子麒麟獏の繡ひ模様縁り猩々緋（古見送り）地織り綴れの錦

○行者山

室町三條上る町より出づる（人形）役の行者葛城の神前鬼の三像なり行者の衣裳角帽子白地錦黒衣紋紗紫地の袈裟を掛け錫杖を持ち洞の中にあり葛城の神の衣裳紅地花の丸小袖萌黄地紗金長絹紅地菊菱の半切り白綸子紋付きの腰帯を着す手に寶輪と末廣を持つ尤も女體なり前鬼の衣裳小袖鳶色朝鮮錦花色地錦花の丸の模様そばつき紅地獨紅錦の半切り白綸子の腰帯太刀を佩き赤熊を項たき手に斧を持つ

縁起

昔し役の行者大峯葛城山の口に石橋を架けんとて一言主尊を使役し其怠慢を責めて呪縛せし體を模せしと云へゞも取るにも足らぬ妄説なり只役の行者は能く鬼人を使役せしと云ふ體を模せしものならん

飾り附

（前掛）中は淺黄地唐織綴れの錦岩に牡丹蝶の模様左右は紅地登り龍下に岩水の模様縁り猩々緋（水引）地織り金地綴れの錦唐子遊びの模様（二番水引）四方共唐織り綴れの錦正面は萌黄地龍の模様（左右の胴巻）唐織り綴れの錦金地眞向の龍中にあり脇には小き龍裾には岩に水の模様瑚珊珠水晶などを用ゐて實に見事なり縁り黒羅紗（見送り）唐織り紅地登り龍と唐の旗様の物二つ合せたる物中縁りは左右共赤地古金襴安楽庵人形の模様總外縁り猩々緋（又一種）唐織り金地婦人の模様上の方に紅地草花ありて縁り猩々緋此見送り二種を隔年に掛くる（後掛）蝦夷錦萌黄地浪に龍の模様是れは見送りの下掛なれば左右の脇裾計り見ゆる物なり此錦は古水引の裂なりしを中古後ろ掛としたるなり

（一番水引の由來）此水引を織りたる人は西山湖七と稱して讃岐國多度郡粟生島の生れにして幼年の頃當町内の鍵屋嘉兵衛方に召し使れ居りしが天性機業を好み十四五歳の頃西陣の高機を見て工夫を凝し終に綴れの錦を我朝にて初めて織り出だし故郷に歸り益〻綴れ織を製出し文化八年未の六月此水引を織り出したりと云ふ

古例

古へより吉符入の日町中會所に集り行者尊に神酒を供し神事行事番の役割りを定む凡べて神事様の協議を爲す又山の松は山科より持ち來る山建ての日には室町姉が小路上る回福寺町へ行事報せの使ひに趣ひく宵夜の日に仝町より朝瓜漬鮒鮓酒米などを齎らし來りて行者尊前にて饗應の式あり又當日は當町より仝町へ三度半

の使ありて山を三條の辻迄出せば全町中來りて三條室町角の家にて老人及び行事番並びに組頭など神酒を頂だき夫れより山を送るの古式あり此外古例種々あれども之を畧す

○鈴鹿山

烏丸三條上る町より出づる（人形）鈴鹿御前の木像上に面を被る衣裳赤地錦の小袖紺地錦つぼ織り入り右の肩を脱ぎ緋精好の大口石の帶を着す頭に金の立烏帽子を頂き左手に長刀右手に末廣を持つ

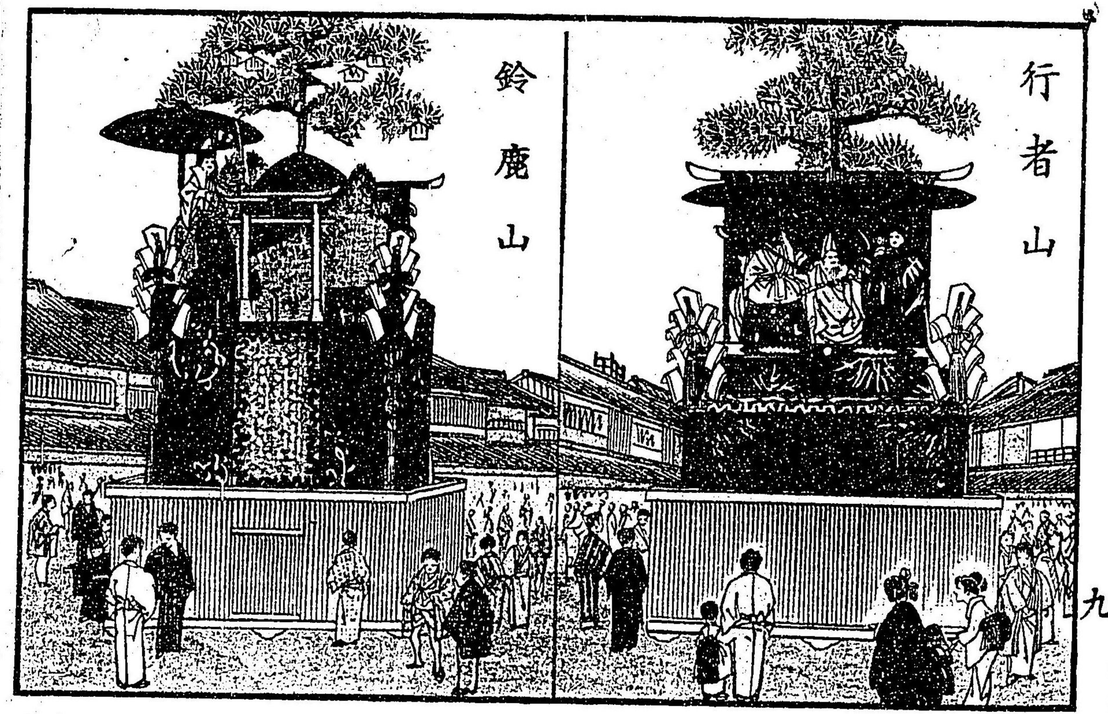
緣起

瀬織津姫鈴鹿山に惡魔を退治するの體を模せり俗に之れを鈴鹿權現とも云ふ

飾り附

前に（朱の鳥居）額に鈴鹿山と書す寶鏡の宮御筆（杉松）眞松の外に二本人形の前にあり（鬼頭）洞の上にあり赤熊の下に天鵞絨を卷く（稽馬）凡そ十五六枚眞松の枝に掛くる模樣は種々ありて年々替る（前掛）唐織り金地綴れ錦仙人の模樣左右萌黃羅紗を付けて（左右の胴卷）前掛と同じ金地綴れの錦西王母壽老人其外種々模樣ありて取分け見事なり（見送り）地織り紅地綴れの錦龍の模樣緣り猩々緋（古飾り付）多分あれども之れを畧す

古例



の使ありて山を三條の辻迄出せば仝町中來りて三條室町角の家にて老人及び行事番並びに組頭など神酒を頂き夫れより山を送るの古式あり此外古例種々あれども之を畧す

○鈴鹿山

鳥丸三條上る町より出づる（人形）鈴鹿御前の木像上に面を被る衣裳赤地錦の小袖紺地錦つぼ織り入り右の肩を脱き緋精好の大口石の帶を着す頭に金の立烏帽子を頂き左手に長刀右手に末廣を持つ

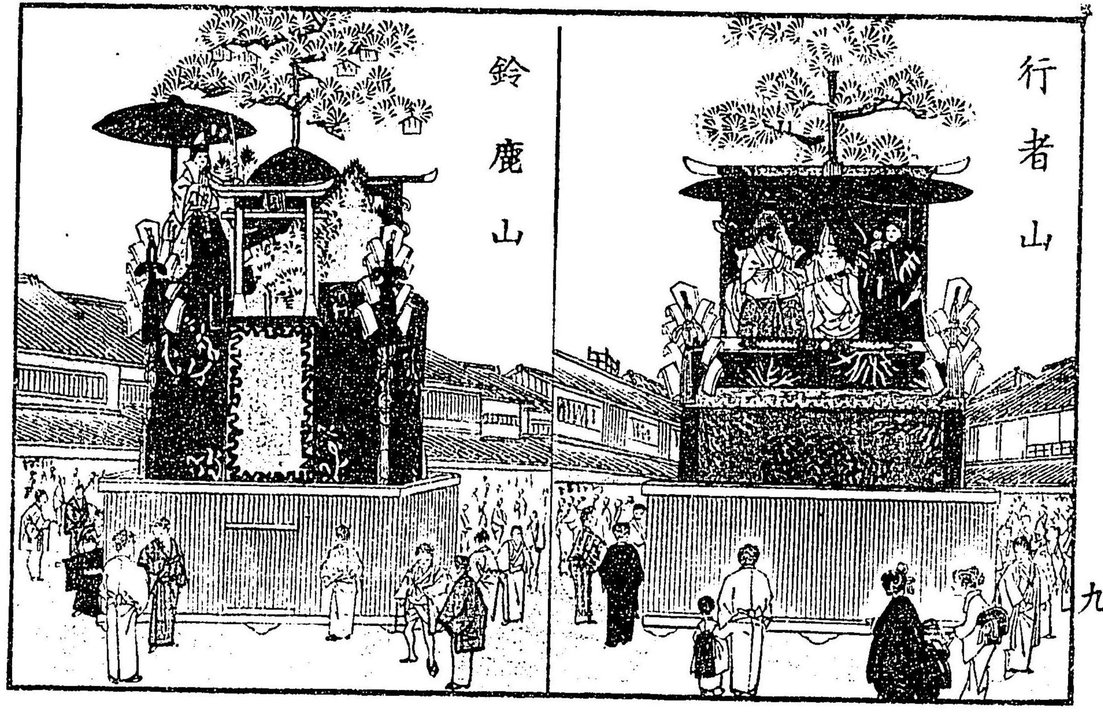
縁起

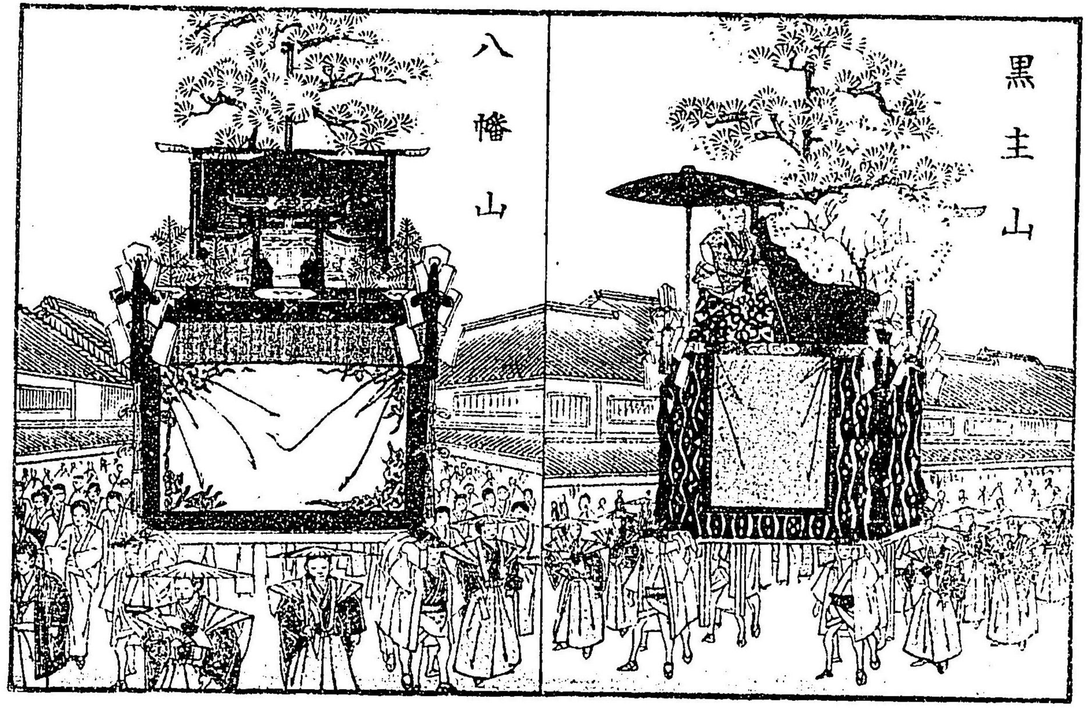
瀬織津姫鈴鹿峠に悪魔を退治するの體を模せり俗に之れを鈴鹿權現とも云ふ

飾り附

前に（朱の鳥居）額に鈴鹿山と書す寶鏡の宮御筆（杉松）眞松の外に二本人形の前にあり（鬼頭）洞の上にあり赤熊の下に天鵞絨を卷く（繪馬）凡そ十五六枚眞松の枝に掛くる模樣は種々ありて年々替る（前掛）唐織り金地綴れ錦仙人の模樣左右萌黄雜紗を付けて（左右の胴卷）前掛と同じ金地綴れの錦西王母壽老人其外種々模樣ありて取分け見事なり（見送り）地織り紅地綴れの錦龍の模樣縁り猩々緋（古飾り付）多分あれども之れを畧す

古例





鈴鹿御前の木像を平常は祇園の御輿舍に預け置き山建ての日町内へ持ち歸り當日の渡りを濟せば又元の如く御輿舍へ預け置くを例とす又宵祭の未の刻頃（今の午后二時）御旅所南の神樂所より巫來りて祈禱し其祈禱札を人形の懐中へ納む則ち此山の古例とす

○淨明山

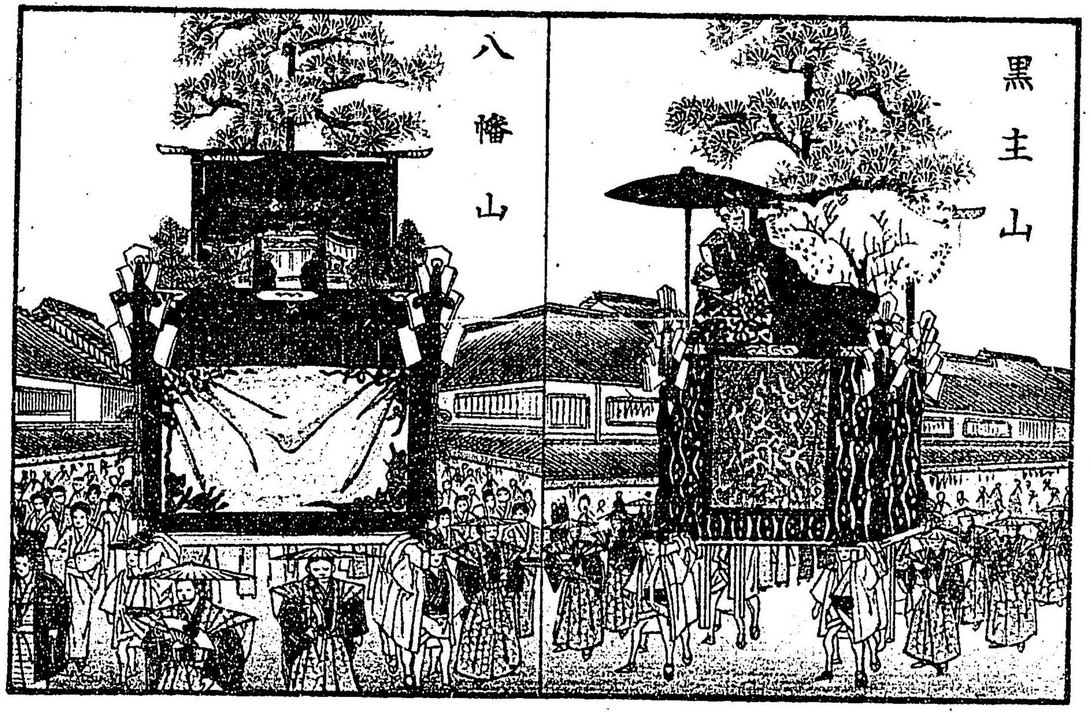
六角室町東へ入る町より出づる（人形）つゝ筒井淨明一來法師の二像淨明の衣裳紺地錦長袍頭巾を被り黒革絨の鎧を着し長刀を持ち太刀を佩く其板袖は正平元年六月朔日製したる珍らしき正平革なり又此の鎧は楠正成公の具足なりと云ひて古き物には相違なけれども楠公討死の時代より考ふれば符合せず腦當は土佐坊昌俊所用の品なりと云傳ふ此れ等は宵祭に飾り置き衆人に拜觀を許す近時用うる物は新作なり一來法師衣裳金鍍緋絨の鎧を着し頭に金の立烏帽子を頂き太刀を佩き右手に長刀を持つ

縁起

古源平の頃宇治橋の合戰に三井寺の衆徒筒井淨明が大長刀を振りて橋上を進み行くを阿闍梨慶秀が召使一來法師後より進み來りて淨明が頭上を跳越ねたる體を模せり

飾り附

（橋）黒塗りの高欄擬寶珠は金鏑矢を數多折り掛く生



鈴鹿御前の木像を平常は祇園の御輿舍に預け置き山建ての日町内へ持ち歸り當日の渡りを濟せば又元の如く御輿舍へ預け置くを例とす又宵祭の未の刻頃（今の午后二時）御旅所南の神樂所より巫來りて祈禱し其祈禱札を人形の懐中へ納む則ち此山の古例とす

○淨明山

六角室町東へ入る町より出づる（人形）筒井淨明一來法師の二像淨明の衣裳紺地錦長籠頭巾を被り黒革絨の鎧を着し長刀を持ち太刀を佩く其板袖は正平元年六月朔日製したる珍らしき正平革なり又此の鎧は楠正成公の具足なりと云ひて古き物には相違なけれども楠公討死の時代より考ふれば符合せず勘當は土佐坊昌俊所用の品なりと云傳ふ此れ等は宵祭に飾り置き衆人に拜觀を許す近時用うる物は新作なり一來法師衣裳金鍍緋絨の鎧を着し頭に金の立烏帽子を頂き太刀を佩き右手に長刀を持つ

緣起

古源平の頃宇治橋の合戰に三井寺の衆徒筒井淨明が大長刀を振りて橋上を進み行くを阿闍梨慶秀が召使一來法師後より進み來りて淨明が頭上を跳越ねたる體を模せり

飾り附

（橋）黒塗りの高欄擬寶珠は金鍍矢を數多折り掛く生

柳を四本挿す（上縁り）荒浪の彫物金箔置之れは一番水引の代用なり（前後の胴巻）黄の呉呂服連異國人物の繡ひ模様縁り猩々緋（左右の胴巻）天鵝絨に人物の模様縁り猩々緋（見送り）核織り紅地浪に龍の模様縁り緋紋縮緬之れは古今類なき珍しき品なり

古例

山に捕す生柳は宇治より持來るを例とすされど近來は伏見街道三の橋某方より送り來る例となれり

見送り絃り織りの由來

古當町に本山善右衛門と云ふ人あり其職業にあらざれども諸事器用にして何にまれなさずと云ふことなし或年山鉾の渡りを見しに其飾何れも奇品にして金繡を粧ひたれども其依る處皆同じ今處に一の奇品を織出し當山の好景を添へん事を議せしに何れも之を賛成したれば夫より晝夜寢食を忘れて工夫を凝し三年の星霜を經て漸く成れり則ち之を名けて絃り織と稱す又上縁り荒浪の彫物四方の内左縁りと後縁りの二方は去る天明八年大火の爲め燒失せしを之れ又同人が補へり故に二方は古作にして二方は新作なり此人別號を素仙翁と云ふ

○黒主山

室町三條下る町より出づる俗に之れを西行櫻とも云ふ（人形）大伴黒主の像なり衣裳總金錦の上着單半臂紺地の紗金鳳凰の模様白地總金の半切り腰帶を着す頭は白髪にして杖をつき末廣を持つ

縁起

歌人大伴黒主が志賀山の櫻を眺る體を模すと云りされど古老の口碑に依れば古は此人形樵夫の風俗にてつま木一荷を置き杖に依りて花を眺むる體なりしを中古裝束を着せしより其體化人高老の形容に似て大に其實を失ひたりと云へり古今集の序に大伴の黒主は其樣賤し云はゞ薪を負へる山人の花の陰に休めるが如しとあり之れは歌の樣をいへるなれども其譬を取りたる人形なりとせば雅味も一入深かるべきを實に惜むべき事なり

飾り附

松の枝と櫻の造り花（前掛）猩々緋に丸龍の繡ひ之れは朝鮮人の官服なり丸の内の鳳凰鶴の模様一方に五だんづゝ掛る（左右胴巻）唐織綴れの錦洲崎地赤桃色白淺黄などのぼかし其上に模様あり松本仙翁の如き草花に飛蝶あり左右の脇猩々緋（見送り）唐織り綴れの錦花色地に花鳥の模様又一種は紅地百子唐織り綴れの錦にて巾丈け充分にして甚だ見事なり此二個隔年に出づる

古例

古へ六月十一日（今の七月廿一日）松と櫻の木は山科より持來る翌日櫻の花を造るなり一軒役に花三十づゝ

を出す但し不淨ある家は除く又翌日町中打寄り人形の衣裳を粧ひ木に花を結び付くる家持ち借家共に甲乙あり て餅を賦る之れを花付けの餅と稱す

○觀音山

新町六角下る町と新町蛸藥師下る町とに二個あり曳山にして兩町より隔年に出だす俗に之れを上り觀音下り觀音と云へども本稱は南北なり近年は双方共圖取らずにて最前最後に引渡す（人形）楊柳觀音の座像にして石座あり鏡を持つ

緣起

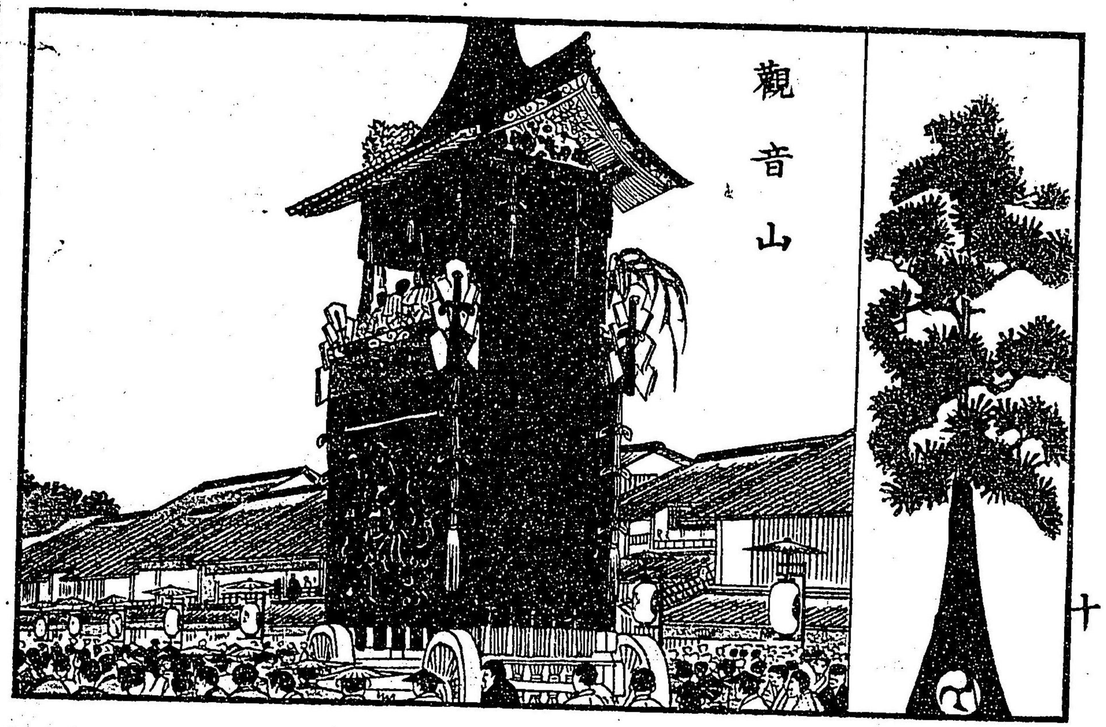
何れも楊柳觀音を安置して惠心僧都の作なり然れども古へ町内に大佛師法橋定春の觀音木像の銘に依れば之れも惠心の作には非るべし

飾り附

眞林左りの三の枝に尾長鳥を置く花瓶右の下にあり柳を生ける（上水引）猩々緋雲龍の繡ひ（下水引）唐織り綾紺地綴り金模樣麒麟鳳凰唐花なり（二番水引）唐織り綴れの錦紅地牡丹の模樣（胴卷）四方共毛氈緣り猩々緋（見送り）地織り綴れの錦唐子遊びの模樣以上は北觀音山の裝飾なり

古例

宵祭の夜子の刻頃町内の若物等寄合ひ觀音の像を箱に納め隣町の間を昇き行き其後山の上に飾る事兩町共



を出す但し不浄ある家は除く又翌日町中打寄り人形の衣裳を粧ひ木に花を結び付くる家持ち借家共に甲乙ありて餅を賦る之れを花付けの餅と稱す

○觀音山

新町六角下る町と新町蛸薬師下る町とに二個あり曳山にして兩町より隔年に出だす俗に之れを上り觀音下り觀音と云へども本稱は南北なり近年は双方共圖取らずにて最前最後に引渡す（人形）楊柳觀音の座像にして石座あり鏡を持つ

緣起

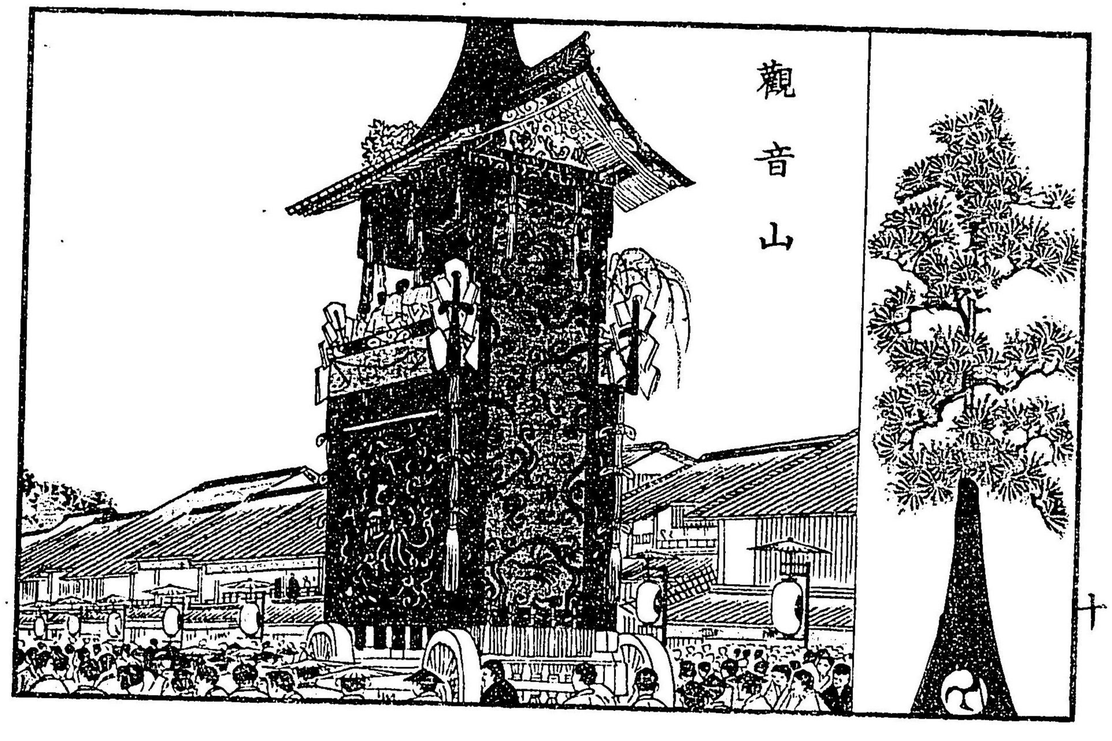
何れも楊柳觀音を安置して恵心僧都の作なり然れども古へ町内に大佛師法橋定春の觀音木像の銘に依れば之れも恵心の作には非るべし

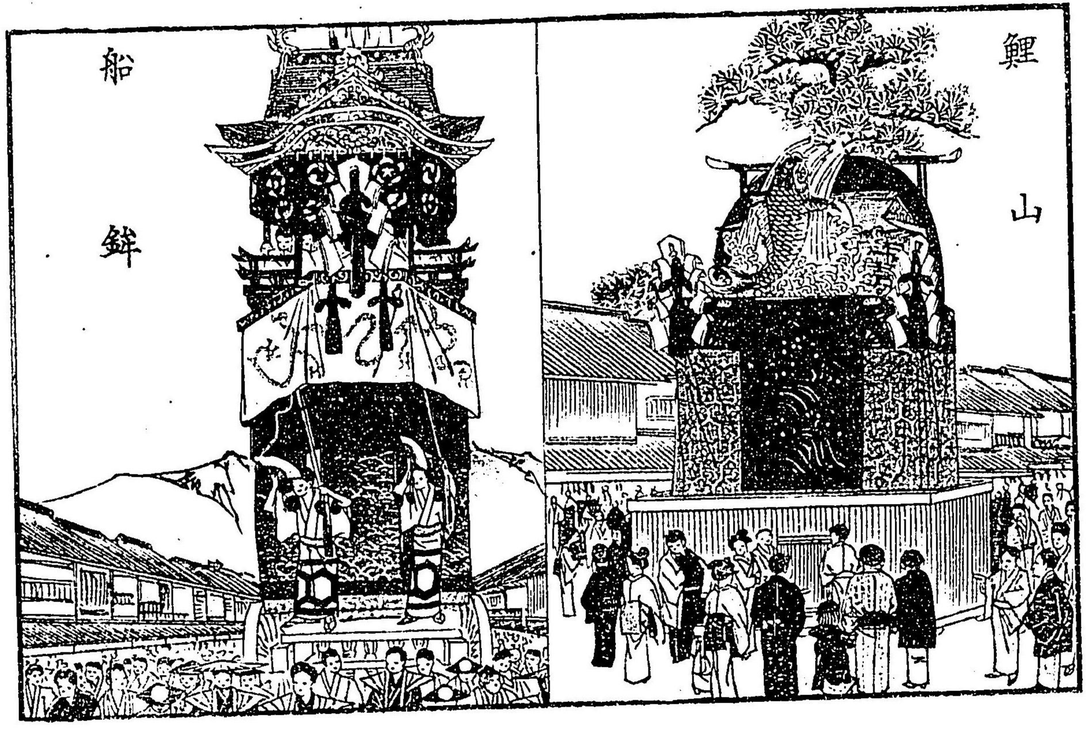
飾り附

眞林左りの三の枝に尾長鳥を置く花瓶右の下にあり柳を生ける（上水引）猩々緋雲龍の繡ひ（下水引）唐織り綾紺地綾り金模様麒麟鳳凰唐花なり（二番水引）唐織り綴れの錦紅地牡丹の模様（胴巻）四方共毛氈縁り猩々緋（見送り）地織り綴れの錦唐子遊びの模様以上は北觀音山の裝飾なり

古例

宵祭の夜子の刻頃町内の若物等寄合ひ觀音の像を箱に納め隣町の間を舁き行き其後山の上に飾る事兩町共





同じ古例なり又古六月八日（今の七月十八日）北嵯峨観音寺村四軒計りより眞松を持ち來る中次第に其家亡び失せ文化九年の頃殘る一軒より持ち來る

○南觀音山

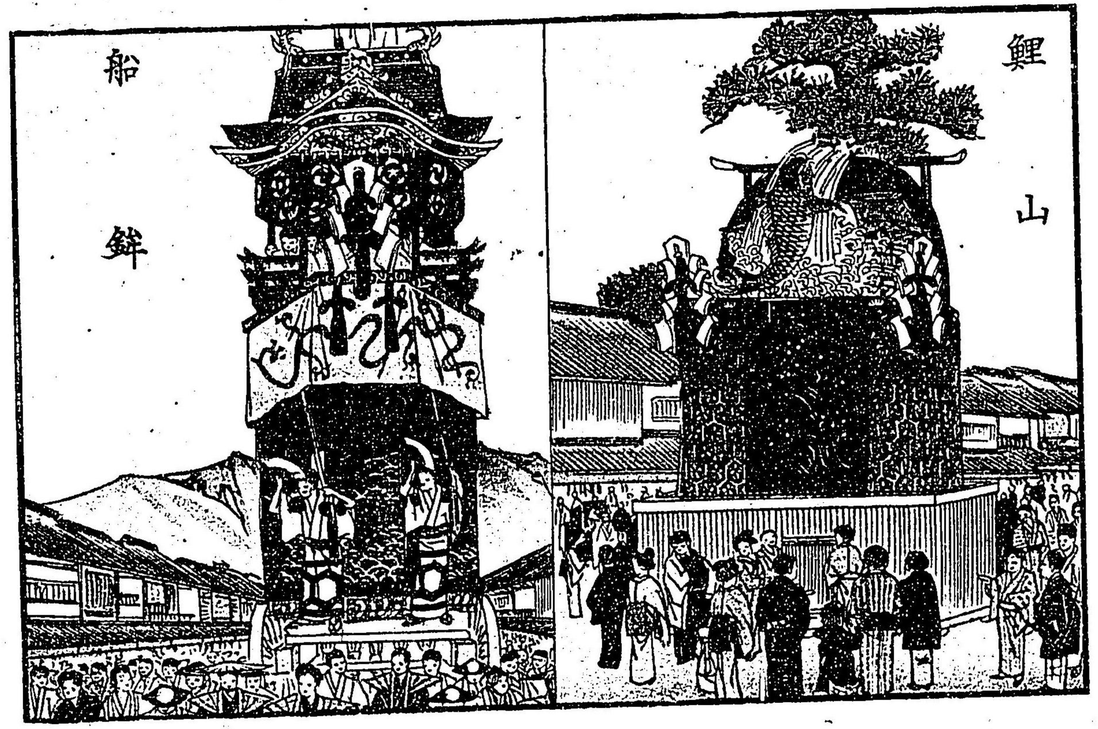
百足町より出づる（人形）楊柳觀音を安置して其緣起は北觀音山と同一なり只異なるは（人形）座像の觀音にして寶冠を被ふり脇士善財童子あるのみ此二體の像は天明の大火に燒失して只觀音の御首のみ殘れり近時用ふる物は尤も新作なり

飾り附

眞松の下より二の枝に白鳩一羽あり花瓶右にありて柳を挿す（上水引）地織り木瓜龍散り雲の模樣（下水引）朝鮮錦紺地小龍の模樣（二番水引）猩々緋模樣水鳥の繡ひ（三番水引）地織り金地七寶の模樣（胴卷）四方共に毛氈緣り猩々緋（見送り）金地に壽老人の繡ひ模樣緣り猩々緋

觀音山の由來

一說に古此山を仕組む時下野國二荒山より觀音の像二體送りたるを新町通六角下る町と同じ通り四條坊門下る町とに預け隔年に祇園會の神事を勤めしと云へり今其實を知るに由なけれども兩山の古例に兩町共有の古錢五貫文と毛氈五枚ありて當年山を出す町へ前年勤めたる町より送りて祭の前日觀音の尊前へ備ふるの



同じ古例なり又古六月八日（今の七月十八日）北嵯峨観音寺村四軒計りより眞松を持ち來る中次第に其家亡び失せ文化九年の頃殘る一軒より持ち來る

○南觀音山

百足町より出づる（人形）楊柳觀音を安置して其緣起は北觀音山と同一なり只異なるは（人形）座像の觀音にして寶冠を被ふり脇士善財童子あるのみ此二體の像は天明の大火に燒失して只觀音の御首のみ殘れり近時用ふる物は尤も新作なり

飾り附

眞松の下より二の枝に白鳩一羽あり花瓶右にありて柳を挿す（上水引）地織り木瓜龍散り雲の模樣（下水引）朝鮮錦紺地小龍の模樣（二番水引）猩々緋模樣水鳥の繡ひ（三番水引）地織り金地七寶の模樣（胴卷）四方共に毛氈緣り猩々緋（見送り）金地に壽老人の繡ひ模樣緣り猩々緋

觀音山の由來

一說に古此山を仕組ひ時下野國二荒山より觀音の像二體送りたるを新町通六角下る町と同じ通り四條坊門下る町とに預け隔年に祇園會の神事を勤めしと云へり今其實を知るに由なけれども兩山の古例に兩町共有の古錢五貫文と毛氈五枚ありて當年山を出す町へ前年勤めたる町より送りて祭の前日觀音の尊前へ備ふるの

例あり

此外に鴈山と稱して三條通り室町西へ入る衣棚町より出せし曳山ありたれども近年渡りを止めて出でされば其所以を調ぶるに據る處なしされば此節又々舊の如く列に加へん事を町内にて相談もある由なれば遠からず曳き渡す事となるべし其節一見して委しく再記し以てこれが責を埋むべし

○十四日祭りの事

往古は之れを御靈會と云ふ古史に六月十四日御靈會の大路を過ぐるの後ち魚類を獻ず之れ先例なりとあり則ち當今の七月廿四日祭にして祇園社御旅所より神輿還幸の祭日なり其順次は同日午後二時頃京極御旅所より三社の神輿列を正して二條を西へ舊二條城の南の馬場にて少憩あり殘り二基は烏丸通りを南へ松原通りを西へ大宮通りを北へ三條通り東へ新町の角御旅所（俗に又旅と云ふ則ち京極御旅所より二度の御旅なるを以てなり之れは往古日吉麿の疫災を送りし神泉苑の緣ある所なり）二神輿此處にて祭式あり此處に於て弦召二條の馬場の神輿へ七度半の使の古式あり）則ち神輿を奉迎に弦召七度使をなし今一度命を受けて路に上る時を計り二條の神輿を舁き初め途にて會す依て之れを七度半の使と云ふ）此御旅處にて三社會合あり供物及び奏樂等ありて三基共に三條通りを東へ寺町を南へ四條を

東へ本社へ還幸あり此供奉は則ち七日神幸の時と異なる事なし實に七日間の繁盛は洛中第一にして遠近各國より來觀する者甚だ多く市街肩摩轂擊雜踏名狀すべからざるなり

御輿拂ひの事

御輿拂ひは古六月十八日（今の七月廿八日）則ち神輿還幸の後なり此式御輿洗ひと全一にして只異なるは神官幣の如き物を以て掃除に擬するなり然して後祇園の神輿舍へ納む此夜祇園町より練り物を出したれども其列前記の如き者なれば此處に省く此外祭日につきて舊式古例數多あれども其説區々にして枚擧するに遑あらず長文を恐るゝが故こゝに筆を止む

京都祇園會圖繪終

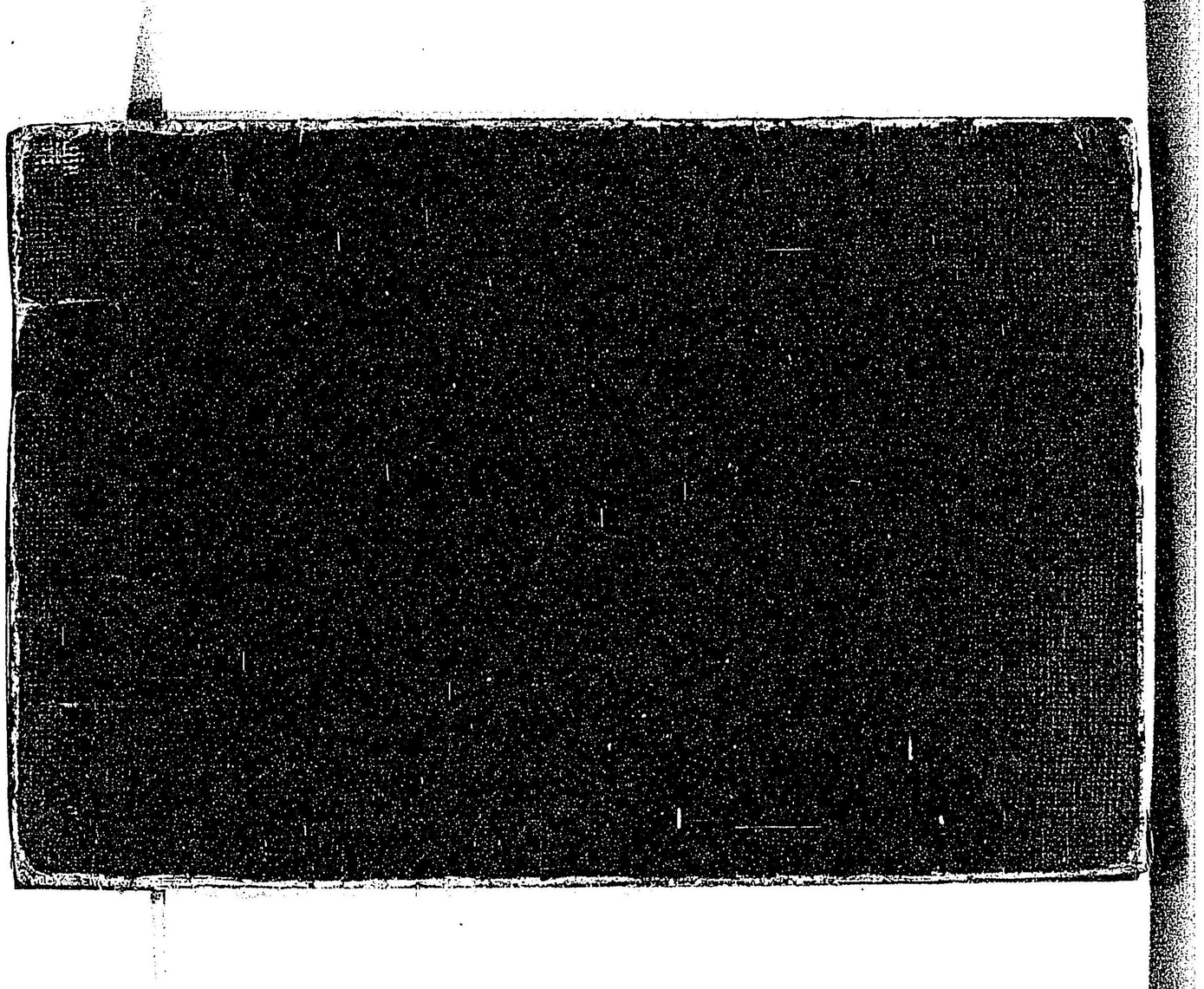
6
269

明治廿七年五月十五日 印刷
明治廿七年五月廿五日 發行

著作者 淺井廣信
京都市東洞院通五條上ル
深草町三番戸

版權所有

發行者 笹田彌兵衛
京都市寺町通錦小路上ル
圓福寺前町廿三番戸

印刷者 名木右三郎
京都市四條通大和大路東入
祇園町北側八十六番戸

印刷所 博成堂
京都市下京區室町通綾小路
下ル白樂天町第三十三番戸